



TITLE:

プリムローズの記憶 ーコメモレ  
イトされるディスプレイ

AUTHOR(S):

小関, 隆

---

CITATION:

小関, 隆. プリムローズの記憶 ーコメモレイトされるディスプレイ.  
人文學報 2003, 89: 45-96

ISSUE DATE:

2003-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/48624>

RIGHT:

## プリムローズの記憶 —— コメモレイトされるディズレイリ ——

小 関 隆

はじめに：プリムローズの〈伝説〉

- 1 プリムローズ・デイへの前史：発端としての葬儀
  - 2 プリムローズ・デイの成立：ディズレイリ像とプリムローズ
  - 3 プリムローズ・リーグの設立：もう1つのコメモレイション
  - 4 プリムローズ・デイの定着：浸透と〈大衆化〉
  - 5 プリムローズ・リーグの成長：〈ナショナル〉な政治団体
  - 6 ディズレイリの語られ方：〈ナショナル・ヒーロー〉の造形
  - 7 プリムローズ・デイの継続と変容：1890年代以降
- むすびに代えて：〈伝説〉の破綻？

は じ め に：プリムローズの〈伝説〉

タイトルからするとやや意外な人物の文章を引用することから始めよう。*Winnie-the-Pooh* (1926年) で有名な A. A. ミルンである。

そう、好きな花は春の花でなければならない。それは疑いない。だから、ラッパスイセン、スマレ、プリムローズ、クロッカスのどれを選んでもいい。すると、選ぶのはスマレか、クロッカスカ。それとも、ディズレイリのお話になったら、自分の像にプリムローズを飾るのか<sup>1)</sup>。

これはミルンのエッセイ集 *Not That It Matters* (1919年) に見られる一節である。ミルンが誕生する前年の 1881 年にベンジャミン・ディズレイリは死亡しているから、プリムローズという花 (ちなみに、日本語では桜草、花ことばは「若さ、若者の恋」) を語るにあたって、プリムローズならディズレイリといわんがばかりのごく自然な調子で彼が持ち出したのは、〈今は亡きディズレイリ〉〈記憶されたディズレイリ〉ということになる。そして、ディズレイリからプ

リムローズを連想する心性は、現在では必ずしも多くの人々に共有されてはいないものの、依然として生き残っており、ディズレイリの命日である4月19日をプリムローズ・デイと呼ぶ慣わしは消滅していない<sup>2)</sup>。1995年に出版されたロンドンの銅像・記念碑のガイドブックには、次のようにある。「毎年4月19日、プリムローズ・デイには、ディズレイリ像は同じ花〔プリムローズ〕の花輪で飾りつけられる。」<sup>3)</sup> ミルンのいう「自分の像にプリムローズを飾る」とは、こうしたプリムローズ・デイの慣習を指している。

ちなみに、同じ4月19日を命日とする著名人、それもディズレイリをはるかに上回るであろう著名人に、チャールズ・ダーウィンがいる。そして、ダーウィンもまた、プリムローズとの因縁浅からぬ人物であった。「…ダーウィンの名もプリムローズと結びつけられている。プリムローズの受精に関する長期にわたる研究から、彼の最も重要な発見のいくつかをもたらされたのである。」<sup>4)</sup> しかし、今日、ダーウィンからプリムローズを連想する者はまずいないだろうと思われる。その命日がプリムローズ・デイと呼ばれ、死後1世紀以上を経てまでその銅像がプリムローズで飾られるディズレイリのケースとは、はっきりと対照的である。プリムローズがディズレイリのフローラル・エンブレムとして定着したことは、ディズレイリはプリムローズが好きだった、という単純な〈事実〉（後述のように、事実かどうかさえ疑わしい）だけからでは、とても説明がつかないだろう。以下では、プリムローズという表象を中核に据えたディズレイリのためのコメモレーションが成立・変容していく過程を明らかにし、〈記憶のかたち〉としてのコメモレーションが歴史的にいかなる機能を果たすのかを考察するための一助としたい<sup>5)</sup>。

ディズレイリとプリムローズが人々のイマジネーションの中で結びついたのは、ヴィクトリア女王を重要な登場人物とするストーリー、すなわち、死の床にあったディズレイリの見舞いに女王がプリムローズを贈り、葬儀の際にも女王手書きのカードを添えたプリムローズの花輪が棺に載せられた、というそれが広く流布されたためであった。1887年に発行されたプリムローズ・リーグ（後述）のパンフレットは、この〈伝説〉をさらに補足する。

「これでヒュンデン〔ディズレイリの所領があるバッキンガムシアの地名〕でプリムローズを愛でる余裕がもてる」、ビーコンズフィールド卿〔1876年、ディズレイリはビーコンズフィールド伯爵に叙される〕が1880年の総選挙の後に〔総選挙で保守党は敗北し、ディズレイリ政権は退陣した〕この彼らしいことばを発した時、自らのことばが歴史をつくろうとしていたことなど、あるいは、自らの好きな花がこの時代で最も重要な政治団体の名称となり、そのバッジになることなど、彼は考えてもいなかった。まるで魔法のように、彼が死ぬとプリムローズは彼のシンボルとなった。彼の墓にプリムローズの花輪を贈ることで、彼の死を記念する4月19日、「プリムローズ・デイ」の儀式に彩りと暖かさ、

そしてかたちを与えた最初の人物の1人が女王であった<sup>6)</sup>。

ディズレイリが死去したのは1881年4月19日、葬儀は翌週の26日に行われた。葬儀の際にプリムローズを持ち出した女王は、その後もディズレイリの命日とプリムローズとを結びつけていく役割を果たす。生前のディズレイリの嗜好や死の床のエピソードはさておき、どうやら決定的な発端は葬儀にありそうである。本稿の議論も、まずは1881年4月26日のヒュンデン教区教会に遡ることから始めたい。

## 1 プリムローズ・デイへの前史：発端としての葬儀

ディズレイリの葬儀は、「非常に大切な友人にして相談相手」「わが国で最も傑出した政治家の1人」の死を惜しむ女王がウェストミンスター寺院への公的な埋葬を望み、時の首相グラッドストンも同趣旨の提案をしたにもかかわらず、ディズレイリの遺言に基づいて、あくまでも私的なそれとして亡き妻の眠るヒュンデン教区教会で「彼女の葬儀と同じく簡素に」執り行われることとなった。葬儀当日、1881年4月26日の『タイムズ』は、この日の葬儀に女王は欠席するものの、皇太子をはじめとする王族が参列予定であることを告知するとともに、「女王自身は…今朝、棺の上に置かれるために瑞々しい花を贈る予定である」ことを伝えている<sup>7)</sup>。プリムローズであるか否かは言及されていないが、この「瑞々しい花」が今日までつづく〈伝説〉のプリムローズであることはまず間違いない。

翌日の『タイムズ』の報道になると、葬儀に登場したメイン・アイテムであるかのように、プリムローズは大々的な扱いを受けている。

女王は「ディズレイリへの」愛惜と敬意をさまざまなやり方で示した。そのうちの1つが、ワイト島で摘んだ野生の花、プリムローズの花輪を贈ることだった。ヒュンデン・パークの芝の堤に咲くこの花を見るのを、彼は楽しみにしていた。花輪に添えられたカードには、女王自身の手によって、「彼の好きな花、オズボーン〔女王の別荘があるワイト島の地名〕より、ヴィクトリア女王からの愛情と惜別の贈り物」と書かれていた。花輪は女王の代理であるレオポルド王子によって棺の上に置かれた。この花はこの日の朝にオズボーンの美しい芝地で摘まれ、花輪としてスペシャル・メッセンジャーによって送られてきた。…葬儀の後、花は持ち出され、墓の柵にかけられた…女王からはもう1つの花輪も贈られた。こちらは永久花とベイリーフの花輪である。この花輪を包む白いサテンの端には、次のことばが金色に刺繍されていた。一方には「ヴィクトリア女王より」、他方には「真実の愛情、友情、愛惜の印に」<sup>8)</sup>。

そもそも、この頃には葬儀に花を捧げること自体が珍しかったのだが、同じ女王から贈られたもう1つの花輪に比べて、「ワイト島」「オズボーン」ということばがあたかも女王が手ずからプリムローズを摘んだかのような印象を与えたせいか、プリムローズにかかわる叙述はいかにも念入りである。プリムローズを媒介とした女王とディズレイリの親愛な関係のイメージが、強いアピール力をもったものと思われる。葬儀の場では、他の王族もバラやカメラアを捧げているが、これらの花についてはなにも語られていない。さらに、〈ディズレイリの好きな花〉は最寄りのハイ・ウィクム駅からヒュンデンへの道程の叙述にも登場する。「ヒュンデン・マナへの道は、今は亡き首相の好きだったプリムローズが点在する公園を抜けていった」<sup>9)</sup>。早くも〈伝説〉の精力的な生産が始まった感がある。臣民の葬儀への参列を見合わせた女王が、早くも4月30日、自身ヒュンデンに足を運んでディズレイリの墓に参ったエピソードも、〈伝説〉のアピール力をさらに強める意味をもったと思われる。ただし、この年の5月には1883年に除幕されるディズレイリ像（ナショナル・メモリアル）をウェストミンスターに設立することが決定されるが、このプロセスではプリムローズは言及されていない<sup>10)</sup>。

「女王の花束とカードからヒントを得、ビーコンズフィールド卿の最初の命日にプリムローズ・デイを「創始」ないし「発明」した人物」とされるのが、インド省出身で保守党系のセント・スティーヴンズ・クラブのメンバーだったジョージ・バードウッドである。女王が提供したきっかけからプリムローズ・デイが成立していくプロセスを理解するためには、この人物の動きを追うことが欠かせない。ディズレイリの葬儀にインスパイアされたバードウッドが最初に提案したのは、翌1882年の命日にセント・スティーヴンズ・クラブのテーブルをプリムローズで飾ることだったが、この提案は「非イングランド的」とであるという理由で却下された。つづいて、プリムローズ着用を呼びかける記事を新聞各紙に掲載することを試みた際には、最初にアプローチした『スタンダード』からは「馬鹿げている」として拒絶されたものの、『タイムズ』や『デイリ・テレグラフ』、『ペル・メル・ガゼット』等から良好な反応を示された。意を強くしたバードウッドは、友人の協力を得て、「コヴェント・ガーデンからアクトンまで」の花屋をめぐり、1882年4月19日に向け、必ずや需要はあるだろうから、プリムローズをストックするようにと要請した。バードウッドが『タイムズ』に送った1882年4月14日付けの筆名による手紙は、こうした活動を踏まえてのものであった。「ここ数日、ロンドン、とりわけウェスト・エンドのあらゆる地区の花屋において、「ビーコンズフィールド・ボタンホール」と呼ばれるものへの需要が大きくなっているのは、特筆に価する興味深い事実です。すなわち、それは今月19日のビーコンズフィールド卿の命日に着用するためのプリムローズの小さな花束のことです。プリムローズが彼の好きな花だったことを想起してください。」<sup>11)</sup> バードウッドたちの動きがどれほどの影響をもちえたのか、正確に把握することは困難だが、プリムローズ着用の慣習を広めようとする意識的な力が作動していた点は確認しておくべきだろう。

それでは、1882年の命日の様子は実際にはどうだっただろうか？ この日、ヒュンデン教区教会ではヴィクトリア女王が同年2月27日に設置したディズレイリのメモリアル（ウェストミンスターのナショナル・メモリアルとは別）の献納式が行われたが、同教会の一角にあるディズレイリの墓には女王から贈られた2つの花輪が飾られた。1つはいうまでもなくプリムローズの花輪、もう1つは菊のドライ・フラワーのそれであった。また、墓を囲む柵には地元の学校の生徒たちが摘んだプリムローズの花輪がかけられた。さらに、この日ディズレイリの墓に参った人々の多くはプリムローズのブーケを携えていた。4月19日を彩る小道具としてプリムローズを利用することが慣習化していく兆しが、明らかに認められるだろう。1年前に語られたプリムローズを媒介とする女王とディズレイリのストーリーを依然として胸に抱く人々が、たしかに少なからず存在したのである。4月19日に先立って、「保守系の新聞」はプリムローズの着用を繰り返し奨励したが、こうした奨励に応えようとする人々が存在したことが、この年にもまた女王がプリムローズを贈ったことと相まって、慣習の定着に向けての流れをつくりだしていった<sup>12)</sup>。

1882年4月19日にどれくらいの人々がプリムローズを着用したのか、信憑性に問題なしとはしないものの、この点に関する証言が残っている。

農村や地方都市では、[プリムローズを着用せよという]奨励は総じて無視されたようです。ロンドンの証券取引所では、かなり多くのプリムローズが着用されていました。庶民院では、3人か4人の議員が勇敢にもこのデコレーションをして、同僚議員の「冷やかし」を浴びました。シティや首都の忙しい地区ではプリムローズはほとんど見られませんでした。ウェストミンスターでは頻繁に見ることができました。私の見積りによれば、オクスフォード・ストリート歩いていた人の1%、リージェント・ストリートでは2から3%、クラブ地区ではおよそ5%がそうでした。花を身につけていたのは概して若い男性でしたが、わずかながら女性もありました。プリムローズが最も目立ったのはバーリントン・アーケイドで、歩いていた男性の約半分、女性のほぼ全員が大きなプリムローズの花束を身につけていました<sup>13)</sup>。

1%だの5%だのという数字は根拠薄弱なものだろうが、プリムローズの着用が広がりを見せていたことだけは確認できる。そして、それは主としてロンドンの現象とされ、ビジネスにかかわる人々よりも、クラブ地区やバーリントン・アーケイドといった〈裕福〉〈ファッションブル〉等を意味する表象となっている場所の人々や、多少なりとも政治とのかかわりを想像しやすいウェストミンスターの人々が担い手として描かれている。事実かどうかよりも、ここでは〈プリムローズを着用したがる人々〉のイメージ（いわゆる民衆とははっきりと一線を画した

人々)を重視しておきたい。

後段で見るように、ウェストミンスターに設立されたナショナル・メモリアル(銅像)の除幕式が行われる1883年4月19日がプリムローズ・デイの慣習を浸透させていくうえで決定的な転換点となったことは間違いないが、そして、1882年のロンドンでプリムローズを着用したのはごく一部の概して〈裕福〉で〈ファッショナブル〉な人々にすぎなかったが、それでも、ヒュンデンのメモリアル献納式に見られたように、除幕式以前からプリムローズの〈伝説〉は無視しえない広がりを獲得し、バードウッドのような人々の〈仕掛け〉のせいもあって、プリムローズ・デイの慣習が成立するための前提を徐々に形成しつつあったといえるだろう。

## 2 プリムローズ・デイの成立：ディズレイリ像とプリムローズ

プリムローズ・デイという呼称がどのあたりに起源をもっていたのかは確定できないが、1883年4月19日のディズレイリ像除幕式を控えた時期になると、この呼称がごく当然のように広く使われている。また、4月19日に向けて早めにプリムローズを注文するように呼びかける花屋の広告が『タイムズ』紙上に登場するなど、プリムローズの需要も高まりを見せていた。こうした状況を受け、『タイムズ』編集部へのこれもまた筆名によるバードウッドの手紙は、プリムローズが「ディズレイリの追憶のために人々の間で神聖化されている」こと、過去1年の間に「『プリムローズ・デイ』が国中で馴染みのことばになった」ことを指摘し、その理由を次のようにまとめている。「プリムローズ・デイのポピュラー・セレブレーションには党派的な感情などまったく込められていません。それは、19世紀イングランド史の最も印象的かつ魅力的なパーソナリティの1人が示したブリリアントな知性、情熱的な愛国心を伴ったシンパシーに対する自発的な感情 … に発しています。」<sup>14)</sup> プリムローズ・デイの〈仕掛け人〉たろうとしていたバードウッドが、プリムローズ着用を「自発的な感情」に帰す議論を展開し、〈自然に人々に追慕されるディズレイリ〉というイメージづくりをしているわけである。また、後段で改めて検討するが、ディズレイリをコメモレイトする際の1つのよくあるトーンが、ここに提示されている通り、党派をこえた存在としてディズレイリを位置づけようとするそれであった。

こうして、4月19日に向けてある種の盛り上がりが顕在化してくると、それへの反発も誘発される。前年のプリムローズ着用率を調査した人物(筆名J.G.F.)は、プリムローズを身につける行為は自発的でも超党派的でもないとして反駁する。「ビーコンズフィールド卿の最初の命日の際、この花を身につけることは概して保守的なシンパシーを示すものと理解され、保守系の新聞もそう解釈しました。保守系の新聞では、それに先立つ数週間にわたり、忠実な支持者たちに対してこうした行動〔プリムローズの着用〕の奨励が精力的に繰り返されました。」こ

の手紙は、アイルランドの文脈におけるオレンジとグリーンに言及しながら、プリムローズ着用のような「党派的シンボリズム」は「政治的分裂を激化させ、悪感情を募らせる」として、4月19日に向けたはしゃぎぶり（明らかにリベラルの側に身を置く筆者から見て）に冷や水を浴びせようとする。「私自身もそうですが、ビーコンズフィールド卿を大変に賢い、あるいは信頼に値する政治家とは認めなくても、それでも彼の才能を称賛し、彼の政治的想像力の大きさや輝き、イングランドの幸福や運命に対する彼の心からの願望を評価する人は多いと思います。より思慮深いコンサヴァティヴと同じく、おそらくこうした人々も、このような子どもっぽい流行が恒久化することで彼の記憶が低俗にされてしまうことを望まないでしょう。」<sup>15)</sup>

この小さな論争が教えるのは、早くもプリムローズにディズレイリのそれとしてだけでなく、党派のシンボルとしての意味が付与されはじめていたことである。J.G.F.の手紙の趣旨には明らかに反しているが、プリムローズの浸透という事態を前に、リベラルの側が自分たちのシンボルをつくろうと試みることは避けがたかったかもしれない。この年のプリムローズ・デイの直後には、メイフラワーによってプリムローズに対抗することが提案されている。「保守党は今や彼らの花ことばを手に入れました。今後、慎ましいプリムローズは保守党の信条のエンブレムとなります。ある花が一方の党の政治を表現するようになったのですから、もう一方の党の方向性を代表するのに適切な花は見つけられないものでしょうか？ … 来月〔5月〕1日、1880年5月に政権の座に就いた党への忠誠を示すために、すべての自由党員は白いメイフラワーの小枝を身につけてはどうでしょうか？」<sup>16)</sup> この提案がほとんど支持を得られなかったのは、5月だからメイフラワーというだけの根拠しか用意できなかった以上、当然のことだろう。ディズレイリと女王という強力な登場人物を擁する〈伝説〉があったからこそ、そして、〈伝説〉を広めていく役割をバードウッドたちや一部のメディアが果たしたからこそ、プリムローズは人々の心にアピールしえたのであって、対抗したいからといってご都合主義的にシンボルを創出できるわけではなかった。

除幕式直前の様子に話を戻そう。かねてからディズレイリを支持する論調をはっきりと示してきた保守系日刊紙『モーニング・ポスト』<sup>17)</sup>は、4月19日当日の論説において、プリムローズを焦点とした「自然発生的」な盛り上がりを大々的に論じている。

あらゆる階層の彼〔ディズレイリ〕の賛嘆者、支持者たちが彼の記憶のために銅像を設立した。今日、彼の命日に除幕されることになっているこの銅像は、壮麗な古い寺院〔ウェストミンスター寺院〕の影が投げかけられ、政治家としての彼の最大の勝利が達成され、彼の名声の基礎が築かれた立法府の2つの議院を望む場所に、近代の最も高貴な政治家たちの銅像とともに、幾世代にもわたって立ちつづけるだろう。…

美しいもの、簡素なもの、上品なものに目ざとかったこの偉大な政治家は、ある道端の



花を好んだ。この花はちょうど今が一番の見頃であり、彼の葬送を彩った花輪にも多く使われた。今年、この花は非常にたくさん美しく咲いている。そして、偉大な伯爵の命日に銅像を除幕することが決定されると、彼の愛した美しいものによって今日のセレモニーを明るくするために、この政治家の好きな花を装飾として身につけようというほとんど自然発生的な提案が行われた。このアイデアが一度口にされるや、人々は熱狂的にそれに賛同した。全国でプリムローズが買い求められている。田舎においてであれ都市においてであれ、ウェストミンスターの大きなパラメント・スクエアで今日見られることになるであろうほど多くのプリムローズが見られたことはおそらくなかった。それは時代を画するだろう。今後、「プリムローズ・デイ」がわれわれの暦に位置を占めることになるだろう。… プリムローズはコンサヴァティズムとよきシティズンシップのシンボルとなるだろう。… 4月のプリムローズはヒュンデンの政治家とその名声を永遠に想起させてくれるだろう。今日のような大きな需要のためにプリムローズ自体がなくなってしまう限り、彼の名声が歴史のページから消え去ることはないだろう<sup>18)</sup>。

この日の除幕式が契機となり、プリムローズ・デイが毎年反復される記念日として定着していく展開が、ほとんどここに予告されていたといってよい。もちろん、「自然発生的」な動きなしに、メディアや〈仕掛け人〉の操作だけで1つの慣習が定着することはありえないが、『モーニング・ポスト』の側にプリムローズをめぐる〈伝説〉やプリムローズ着用の慣習を浸透させようというはっきりとした意志があったことは間違いないだろう。論説の念頭には、いわば〈シナリオ〉(漠然としたものでしかなかったにせよ)が存在していたのである。同じ日の『モーニング・ポスト』に掲載されているディズレイリのための詩は、「冷たい光の中で育った蒼白きプリムローズ、弱々しく、しかし夜のように美しく汚れなく、太陽を待つ」と始まり、プリムローズの〈伝説〉を前提として、ディズレイリをプリムローズにたとえることで全体を構成している<sup>19)</sup>。除幕式本番に向けて、下準備は精力的に遂行されていたわけである。

4月19日当日はあいにくの雨天だったが、『モーニング・ポスト』の報道によれば、プリムローズは「きわめて広範」に身につけられた。「あらゆる場所にプリムローズが見られた。ジェントルマンたちのボタンホールに、レディたちのボネットに、[ディズレイリの]銅像の台座に大量に敷き詰められて、敷地内のいくつかのポイントにバスケットにアレンジされたかたちで、記念の花輪に、あるいは単独で、あるいはヴァイオレット、バラ、シャムロック、アザミとともに、織り込まれて。さらに、この慎ましい花は銅像を取り囲む群衆の装飾品としても大量に目撃された。」議会に登院した議員の多くはプリムローズをあしらっていたし、車を牽く馬の耳にプリムローズをつけた御者もいた。グリニッジ・コンサヴァティヴ・クラブのように、自らのクラブ・ハウスをプリムローズで飾りつけた例もあった<sup>20)</sup>。「人間の愛情という

自発的な感情によって」か否かはさておき、「国王の命令によってでも、枢機卿の指示によってでもなく」<sup>21)</sup> プリムローズを着用した人々が多数に上ったことはまず間違いない。いわば敵対する立場にあったエディ・ハミルトン（グラッドストーン首相の私設秘書）の日記には、次のようにある。「この日 [4月19日], B卿の名誉を称えて、彼が好きな花だったと思われるプリムローズを身につけるというセンチメンタル・ホビーが始まった。驚くほど不適切であり、非イングランド的である！」<sup>22)</sup> ハミルトンが憤慨せざるをえないほど、プリムローズが広範に、つまり、前年のように〈裕福〉で〈ファッショナブル〉な人々によってだけでなく、民衆によっても、着用されたと考えてよいだろう。上述の『モーニング・ポスト』論説に見え隠れしていた〈シナリオ〉は見事に実践に移されたのである。プリムローズ・デイの起源に関する後年の語りにおいては、こうした〈シナリオ〉の存在は概して忘却され、〈自発的なプリムローズ着用〉ばかりが強調されることになるわけだが、これもまた〈シナリオ〉には織り込み済みのことだったのかもしれない<sup>23)</sup>。

ディズレイリ像除幕式そのものについて検討する前に、この日のヒュンデンの様子を確認しておく、女王からは前年と同じく2つの花輪（1つはプリムローズ、もう1つは白の永久花）が届けられており、これらは教区教会のディズレイリ・メモリアルに捧げられた。前年と違うのは、全国の保守党系団体や個人から大量の花輪その他が送られてきていることで、そのほとんどはプリムローズだったと思われる<sup>24)</sup>。ヒュンデンにプリムローズを届ける慣習も、前年をはるかに上回る規模で繰り返されたわけである。

翌20日の『モーニング・ポスト』論説は、予言した通り4月19日がプリムローズに彩られたことに、満足の意を表明している。「昨日、ビーコンズフィールド伯爵の命日が、この真に偉大な人物の記憶に大変相応しいやり方で祝われた。ロンドンの街頭では、ボタンホールへのプリムローズ着用がほとんど至る所で見られた。ロンドンのあらゆる地区で、人々の多くが、イングランドの最も献身的な息子の1人の美德と奉仕を偲ぶ証左となるこのデコレーションを着用している姿が目撃された。」<sup>25)</sup> 『タイムズ』論説もまた、「この日の光景で本当に興味深かったのは」、プリムローズ着用というかたちで示された「あらゆる地位の人々に抱かれたシンパシー」であったと評価する。「『プリムローズ・デイ』にビーコンズフィールド卿の好きな花を身につけるように求める流行を、過大評価するのは簡単なことだろう。…しかし、昨日のこうした行動は、ロンドンのあらゆる地区で、実に不向きな天候にもかかわらず、行われたのである。このことを説明する理由はただ1つ、すなわち、なんの疑いもないことだが、ビーコンズフィールド卿の人間性が彼の時代のポピュラー・イメージに深い印象を残しているという単純な事実である。」<sup>26)</sup>

つづいて、この日のいわばメイン・イベントであったディズレイリ像の除幕式について見てみよう。除幕式を主催したのはナショナル・メモリアル設立に向けて特別に結成された委員

会であり、委員会の議長は保守党の庶民院議員団長スタッフォード・ノースコートが務めていた。除幕式の司会進行に同委員会の副議長、自由党のアーサー・ラッセルがあたったことには、ディズレイリ像が「ナショナル・メモリアル」と称するに相応しい、超党派的なメモリアルであることを演出する狙いがあったと思われる<sup>27)</sup>。除幕に引き続くノースコートの演説からも、ディズレイリを〈ナショナル〉な追悼の対象にしようという意図が読みとれる。「2年前の今日、首都中で、そして国中でといっても過言ではないくらい、深く真正で優しい感情が表現されました。…首都中で、そして最上層から最下層まであらゆる階層の人々が、憂慮と同情、悲しみという共通の感情を抱いていたのです。」つづいて演説に立った保守党の貴族院議員団長ソールズベリは、ちょうどこの頃、ディズレイリの後継党首の座をめぐってノースコートと争っていた人物であるが、そのような対立を演説に持ち込むことはなく、ノースコートの演説に沿い、超党派的な存在としてディズレイリを描き出した。「ビーコンズフィールド卿の記憶はイングランド国民の心に長く生きつづけるでしょう。…それは、彼が党派的な問題よりも幅の広い感情によって鼓舞され、幅の広い理念によって動かされていたからです。」除幕式における語りにははっきりと示された志向性は、ディズレイリを単なるコンサヴァティヴ・ヒーローではなく〈ナショナル・ヒーロー〉にしようというそれであった。いうまでもなく、除幕式の場面にも多くのプリムローズが見られた。プリムローズのブーケを携えたソールズベリ夫人をはじめ、「ほとんど例外なく、レディとジェントルマンはビーコンズフィールドのエンブレムを身につけていた」し、銅像の前には皇太子からのプリムローズの花輪が置かれた。除幕式の最後には、メモリアル委員会への支援に感謝する中で、ノースコートがプリムローズに言及している。

今私たちが目にしているこれらの美しい花に関してですが、私は、昨日と今日の間に、あらゆる階級の人々から、帝国のあらゆる地域から、王族の方々からも、姫君たちからも、小農民たちからも、少なくとも100万に上るプリムローズを受け取りました。そして、それがスコットランドからであれウェイルズからであれ、プリムローズを送った人々は協力という1つの感情によって突き動かされていたのです<sup>28)</sup>。

除幕式の当事者によってもプリムローズへの注目が喚起され、しかも、このアイテムは階級や地域をこえて広がり、連合王国や帝国のさまざまな構成部分が一致しうるディズレイリ追悼のシンボルとして、〈ナショナル・ヒーロー〉というディズレイリのイメージを支える役割を担わせられているわけである。プリムローズが「自発的」に着用されたという言い方には真理が含まれてはいるだろうが、同時に、それを煽り、巧妙に利用しようとする意志も4月19日の周辺には明らかに存在したと考えられる。

こうした超党派的で〈ナショナル〉な存在というディズレイリのイメージを構築する狙いは、『タイムズ』と『モーニング・ポスト』の論説にも示される。『タイムズ』によれば、ディズレイリほどそのキャリアを通じて厳しい批判や非難にさらされた政治家は珍しかったが、しかし、「死の前には彼は保守党の忠誠と敬愛をかちとった」し、「彼が死ぬと、自由党の辛らつな感情も驚くほどに弱まった。」そして、死の2年後には、除幕式の司会をラッセルが務め、グラッドストン政権の代表も参列したことに示されるように、ディズレイリは党派をこえて称賛と追慕の対象になっている。『タイムズ』は、こうした事態は「イングランドの政治生活に特徴的」であると論ずる。「幸せなことに、イングランド人は依然として、互いを尊敬したまま、公的な事柄についての見解や政策の評価を異にすることができる。他国の政治を波乱に充ち不安定な性格のものとしている憎悪、疑念、不寛容に対して、これほどよい防波堤はありえない。」〈イングランド的〉と呼ばれるべき超党派のイベントで銅像を除幕され、「あらゆる地位の人々」が掲げるプリムローズによって追悼されるディズレイリは、まさに〈ナショナル〉な存在である、これが『タイムズ』の趣旨であろう。そして、〈ナショナル〉な存在であるからこそ、ディズレイリの記憶は特別に長く残されていくのである。「ビーコンズフィールド卿は、崇拜とはいわないまでも、少なくとも称賛と愛情の込められた気持ちの対象になっている。この気持ちは、程度というよりも種類において、ピールやパーマストンのような人々を彼らの死の1年ないし2年後に追悼に値すると評価した冷静な政治的判断とは異なるものである。」<sup>29)</sup> こうしてピールやパーマストンと差異化されたディズレイリは、〈ナショナル・ヒーロー〉といういわば別格の存在に近づけられていく。

『モーニング・ポスト』は、除幕式は「イングランド国民の思いを正確に反映するセレモニー」であったと総括する。ここで意味されているのも、党派をこえた「多くの指導的政治家の列席の下に」、「今ではネイション全体のもの」であるディズレイリのメモリアルが除幕されたことである。「彼の墓の前では、党派間抗争の雑音や騒音はたちどころに静かになる。能力という真正な力によって国家の最高の地位にまで上りつめたこの人物を、傑出した政治家として、軽んじえない詩人として、ずば抜けた能力の議会指導者として、文明世界全体の称賛をかちえたこの人物を、すべてのイングランド人は誇りとしているのである。」<sup>30)</sup> 「すべてのイングランド人」を僭称して、『モーニング・ポスト』もまた、〈ナショナル〉な存在としてのディズレイリ・イメージを構築しようとするのである。

このような〈ナショナル・ヒーロー〉としてディズレイリを性格づける議論は、『タイムズ』や『モーニング・ポスト』といった保守系の新聞のみから発せられたわけでもなかった。たとえば、リベラル系を代表する『マンチェスター・ガーディアン』も、早くもディズレイリの死の翌日の論説において、「彼の死に対してすべてのイングランド人が示すであろう悔やみと敬意という自然な捧げもの」を何者も妨げないだろうと論じ、「私的な、あるいは政治的な敵対

関係」をこえた「巨人の種に属する」ディズレイリへの〈ナショナル〉な追悼を唱えていた。上述の『タイムズ』論説を予想させるかのように、「彼自身の政治的盟友や支持者によってだけでなく、政治的敵対者によっても同じように」ディズレイリの死が惜しまれているのは、「幸いなことに、しばしばきわめて熱を帯びるとはいえ、わが国の政治的な闘争は根底において憎悪と無縁である」ことの証左である、と議論はつづけられた。除幕式翌日の論説もまた、「ビーコンズフィールド卿の政策の多くは有害であった」ことを指摘しつつも、「政治的敵対者からの敬意」がディズレイリに与えられないなら、それは「イングランド人のキャラクターやイングランドの国制にそぐわない」とし、党派をこえた追悼がディズレイリには相応しいことを主張している。「彼は、ある決定的な意味において、われわれの一部だったのである。」そして実際、除幕式は「あらゆる方面からの寄付によって支えられた」ものであった<sup>31)</sup>。

『タイムズ』や『モーニング・ポスト』が〈ナショナル・ヒーロー〉化の戦略をもち、『マンチェスター・ガーディアン』もそれに事実上同調していたとすると、プリムローズに対抗するための〈自由党のメイフラワー〉を云々する提案はいかにもの外れといわざるをえない。もちろん、それをコンサヴァティヴ・エンブレムとして利用する意図も同時に存在してはいたが、プリムローズという表象はいわばもう1ランク上に位置づけられようとしていたのである。

### 3 プリムローズ・リーグの設立：もう1つのコメモレイション

超党派的性格がしきりに強調された一方、除幕式には保守党内の抗争が流れ込んでいた。そして、この抗争の渦中にあったのが、プリムローズ・リーグ設立の中心人物となるランドルフ・チャーチルである。まず、保守党内の対立の構図を確認しておこう。

1880年総選挙での敗北から保守党を立て直すことのできる唯一の人物のはずだったディズレイリの死後、保守党は明確な後継者を見出せない状況に置かれていた。「誰も彼の戦斧を振るえず、彼の弓を引けもしない。」<sup>32)</sup> 上述したように、有力候補は2人、各々貴族院と庶民院を率いるソールズベリとノースコートだったが、後継党首の選出までには予想外の時間が費やされることになった。庶民院の優位は既にこの時期には広く受け入れられており、その意味ではノースコートの方が首相候補に相応しいポジションにいた。しかし、アグレッシブなパーソナリティをもたず、かつてグラッドストンの秘書を務めた経験ゆえ、依然として自由党党首への敬意を抱きつづけていたノースコートに不満を覚える向きは少なくなかった。そして、党内におけるノースコート批判の急先鋒となったのが、マールボロ公爵家の三男だったランドルフ・チャーチルをはじめとする若手保守党議員のグループ、いわゆる「第四党」であった<sup>33)</sup>。庶民院において、「第四党」の面々はグラッドストン政権の対アイルランド政策や対エジプト政策を厳しく批判したが、その真のターゲットは効果的な政府批判を遂行できないノースコー

トだった。雄弁で知られる自信家であり、政治的野心を隠そうとしないチャーチルにとって、ソールズベリを支援すべきことは明らかだった。ソールズベリはチャーチルと同じく名門貴族の家系をひく人物であったし、なによりも、ノースコートを退けてしまえば、1874年以来の議員歴しかもたない自分が庶民院議員団長になる見通しが開けるかに思われたからである<sup>34)</sup>。

「第四党」はしばしば党指導部の意に反する独自の方針で行動し、党内の有力者のひんしゅくを買ったが、生前のディズレイリは、違和感を覚えつつも、いささか行儀の悪い「第四党」の若手政治家たちに好意を示し、助言を与えることもあったという。「私は全面的に諸君たちに共感します … なぜなら、私自身リスペクタブルであったことなど一度もないのですから。」こうしたディズレイリの発言が残されたため、後段で述べるように、チャーチルらは〈ディズレイリの後継者〉というイメージをまといやすく、自らも積極的にそう称することになる<sup>35)</sup>。

1883年3月末に明らかになったディズレイリ像除幕式のプログラムによれば、除幕およびディズレイリに関する演説を行うのはノースコートであり、ソールズベリにはノースコートへの感謝決議を提起するという副次的な役割しか与えられていなかった<sup>36)</sup>。ノースコートがメモリアル委員会の議長であったことを思えば当然といえなくもないが、チャーチルから見れば、これはあたかもノースコートが保守党党首であるかのようにふるまうことを許すものだった。既に3月10-11日には、両者の間でかなり激しいやりとりが行われていた。「第四党」の活動ぶりが党の規律を乱していることを批判し、「わが党の内部に独自の組織が明らかに存続しているという事態には反対せざるをえません」と警告するノースコートからの手紙に対して、チャーチルは次のように反撃している。「議会に入ってから以来、私は常に自分の判断に基づいて行動してきました。そして、今後もそうしつづけるでしょう。というのも、こうした方向で活動した結果が好ましくないものだと思えたことなどまったくないからです。」<sup>37)</sup>

このやりとりで決定的となった敵対関係の流れを受け、チャーチルは3月29日の『タイムズ』に匿名書簡を掲載する。

最近の『タイムズ』に載せられた一節、公共的な寄付によって設立されたビーコンズフィールド卿の銅像がサー・スタッフォード・ノースコートによって除幕されるという趣旨のそれに、私は関心を寄せざるをえません。

この決定は、私を含め、メモリアルのために心を込めて寄付をした多くの者たちに相談するというかたちをまったくとることなく、くだされたのです。

…

われわれの多くは、ビーコンズフィールド卿の政権 … において彼の同僚であり、彼が死去した時に属していた議院のメンバー、そして彼の後継者としてその議院の議員団長を務めているソールズベリ卿に除幕の仕事が委ねられるのが正当だと考えています。

亡きビーコンズフィールド卿を一貫して支持してきた者として、彼の銅像の除幕式が、彼の経歴をコメモレイトする機会になるのではなく、トーリ党内のある派閥によって瑣末な勝利を味わう機会として利用されるのを見ると、深い悲しみと屈辱を覚えます。

…

問題が単に銅像の除幕だけのことであれば、私はこのようなコメントを寄せる必要があるとは思えなかったでしょう。しかし、とられようとしているステップははるかに深刻な重要性をもつステップなのです。

それは、サー・スタッフォード・ノースコート一派が、ソールズベリ卿が党首になるのが自然であるとする党内のずっと多くの人々に対して恒久的な勝利を収めようとする一連の企て（おそらく、サー・スタッフォード・ノースコートの同意を得ていない）の延長なのです<sup>38)</sup>。

さらに、4月2日の『タイムズ』に今度は署名入りで掲載された書簡において、チャーチルは3人の保守党党首の有力候補（ソールズベリ、ノースコートに加え、ケアンズ）を比較し、「もしも有権者がイングランド人らしい心持ちにあるならば、彼らはソールズベリ卿の周りに結集するだろう」との結論を導いている。こうして、ディズレイリ像除幕式には、ディズレイリの「一貫した支持者」を自認するチャーチルによって、保守党内の権力闘争が持ち込まれたのである<sup>39)</sup>。

4月19日にプリムローズ着用の広がりを目撃したことが、チャーチルらがプリムローズ・リーグ設立の準備に着手する決定的な契機になったことは後段で述べる通りだが、ノースコートが取り仕切るかのような式次第を攻撃してきたためもあったか、除幕式そのものについてのチャーチルの評価はかなり批判的である。「除幕式で行われた演説から、希望や明るさの兆候をまったく見てとることができないのは、特筆すべきことである。つくりもののじみた称賛、退屈な形容、陰気な回想があの日を支配していた。」このコメントはチャーチルが『フォートナイトリ・レビュー』に寄せた文章に含まれているものだが、その中で彼は保守党の「デュアル・コントロール」への攻撃をつづけ、「保守党の才能と経験が集積している」貴族院にこそ依拠すべきであるとの言い回しで、再びソールズベリへの期待を表明している<sup>40)</sup>。

さきにも触れたように、チャーチルらにとって、〈ディズレイリの後継者〉という自己イメージを構築することは、意識的に取り組むべき重要な課題だった。「デュアル・コントロール」の下にある保守党の現状に対する批判は、ディズレイリとその〈後継者〉（自称〈後継者〉）としての自分たちの路線こそが保守党のあるべき姿に適っているという議論と表裏一体になっていた。「その時 [1880年総選挙] から今日まで、「ああ、ビーコンズフィールド卿が生きていてくれたら」と叫んだり、嘆いたり、考えたりしたことのないトーリ党員は … ほとんどい

ないだろう。このことは、アビー・グリーンに立つ銅像以上に朽ちることのない、亡き党首にとって真に誇るべきモニュメントである。」「トーリ党の政策と原則が驚くほどの展開を経ない限り、ビーコンズフィールド卿の統治理論の秘密が広く人々に知らしめられない限り、…ビーコンズフィールド卿にはそれを夢み、示唆し、スケッチを描く時間しかなかった帝国統治と社会改革の計画が完成されない限り、…大きな機会は失われ、わが党は災難に陥るだろう。」<sup>41)</sup>そして、ディズレイリという表象を〈横領〉しようとする際に、「第四党」の人々が大いに活用したのが、〈トーリ民主主義〉なるキャッチフレーズであった。とりわけチャーチルはトーリ民主主義ということばとともに語られることの多い人物で、たとえば『タイムズ』の死亡記事は彼を「トーリ民主主義のチャンピオン」と呼んでいるし、「ディズレイリによって高く掲げられたトーリ民主主義のトーチは、彼の死後、生き生きとしてはいるがバランスを欠いたランドルフ・チャーチル卿の手に引き継がれた」として、トーリ民主主義を核とした2人の継承関係を指摘する評価も存在する。トーリ民主主義についての立ち入った検討は別の機会に譲り、ここでは、このことばが〈ディズレイリの後継者〉というイメージを形成する際にきわめて重宝に利用されたことを確認するにとどめておく<sup>42)</sup>。

チャーチルらが〈ディズレイリの後継者〉とのイメージを獲得するうえで、トーリ民主主義のレトリックの活用以上に効果的だったと思われるのが、プリムローズを名に冠した団体の設立であった。彼らが設立するプリムローズ・リーグという団体とその活動は、プリムローズ・デイの慣習とはまた違ったディズレイリのコメモレイションの〈かたち〉であった。

ディズレイリ像除幕式に対してチャーチルが冷淡な目を向けていたことは上述した通りだが、しかし、4月19日の経験がチャーチルや「第四党」のメンバーに強烈なインスピレーションを与えたことも事実である。息子ウィンストンのランドルフ・チャーチル伝には、後にしばしば引用されることになる以下のような叙述がある。

プリムローズ・リーグはビーコンズフィールド卿の銅像除幕式から生まれた。サー・ヘンリ・ウォルフは除幕式に出席せず…午後遅くになって庶民院に登院した。議院のクローク・ルームの有名な管理人、コヴ氏が彼にいった。「プリムローズを身につけなければいけませんよ。」そして、ウォルフに一輪のプリムローズを渡した。プリムローズを飾って議場に入ったサー・ヘンリは、保守党議員全員が同じようにビーコンズフィールド卿の好きだった花を身につけているのを見た。この光景は彼に鮮烈な印象を残し、ともに帰宅する途上、彼はランドルフ・チャーチル卿にいった。「なんとたくさんのプリムローズだろう！このことを活かすべきだ。「プリムローズ・リーグ」を始めたらどうだろう？」ランドルフ卿もすぐに興味を示した。「君のアイデアを実行するプランを立てるんだ。そして、なにができるか検討してみよう」と彼はいった<sup>43)</sup>。



細部まで信用しうる叙述とは思えないが、この日に目撃されたプリムローズ着用の広がりによってウォルフが強く印象づけられたことは間違いないだろう。自分たちの意向をより自由に表現できる拠点として、党外に政治団体を設立することを以前から考えていたチャーチルらは、4月19日の光景がはっきりと示したように、広く愛惜と敬意を集めるディズレイリの記憶を利用することを思いついたのである。プリムローズにちなんだ団体を結成するための協議がこの年の秋にかけてつづけられ、このプロセスには、「第四党」の面々（パルフォアを除く）だけでなく、若干の他の保守党議員や、「第四党」とりわけチャーチルに早くから支持を与えてきた『モーニング・ポスト』（チャーチルは「私の新聞」と呼んでいた）の社主アルジャーノン・ボースウィック<sup>44)</sup>、編集長アルフレッド・スレイドも加わった。プリムローズ・デイの〈シナリオ〉を描いた『モーニング・ポスト』は、もう1つのコメモレーションにも加担していたわけである。そして、こうしたプリムローズ・リーグ設立に至る経緯においてイニシアティブを発揮したのは、チャーチルよりもむしろウォルフであった<sup>45)</sup>。

プリムローズ・リーグの発端は慎ましいものだった。「これほど控えめに始まった重要な事業はかつてなかった。」1883年11月17日、カールトン・クラブのカード・ルームにおけるごく小規模な会合が、プリムローズ・トーリ・リーグの設立を正式に決定した。この会合では、チャーチル、ウォルフ、ゴースト、スレイドの4人が構成する指導部（当初はルーリング・カウンシル、1885年3月からはグランド・カウンシルと称した）が選出され、以下のような設立宣言に誓約を立てた。「「プリムローズ・トーリ・リーグ」の名の下、ここに1つの政治的ソサエティが設立される。… リーグの目的は以下のトーリの諸原則を推進することである。すなわち、宗教、国制、「グレート・ブリテンの帝国覇権」の護持である。」<sup>46)</sup> 名称においても、「トーリの諸原則」という表現においても、はっきりと保守党を支持する団体であることが、発足時には明示されていたのである。また、ルーリング・カウンシルの構成員の名は伏せられていた。このことは、4人の中でも特にチャーチルが、プリムローズ・リーグを「若く意欲的なコンサーバティブ・エリート」による準秘密結社とする意向をもっていたことに起因する。チャーチルは大衆的な団体を構想してはいなかったものであり、実際に当初のメンバーの多くは私的な人脈に属する人々であった<sup>47)</sup>。

プリムローズ・リーグのこうした秘密主義と党派性は、同年11月24日の『モーニング・ポスト』の報道にはっきりと現れている。

1つのトーリ・ソサエティがプリムローズ・リーグという名で結成されたことをわれわれは知った。このソサエティの活動にかかわる目的、規約、その他の詳細は秘密だが、一般的に次のようにはいえると確信する。すなわち、そのメンバーたちはビーコンズフィールド卿の原則と指針に鼓舞されている。ビーコンズフィールド卿の好きな花をバッジに採用

し、ビーコンズフィールド卿の最も名高いことば [Imperium et Libertas] をモットーに選択したこのアソシエーションは、帝国中の政治的抗争に小さくない影響力を行使することをおそらくは運命づけられている<sup>48)</sup>。

秘密主義と党派性だけでなく、ディズレイリからの継承性をも強調していることが注目されるが、この点については後段で改めて扱いたい<sup>49)</sup>。

はっきりとした党派性をもつ準秘密結社というチャーチルの志向性は、しかし、規約の確定や職員の雇用といった水面下で進行するルーリング・カウンシルの作業において指導力を発揮したウォルフによって、段々と否定されていく。実際には、チャーチルのそれではなく、ウォルフの構想に沿ったかたちで、プリムローズ・リーグは性格づけられていくのである。ルーリング・カウンシルが発した文書には、次のようなくだりがある。「… 無神論者とブリテン帝国の敵を除く、あらゆる階級、あらゆる信条の者を擁する新たな政治団体の結成が望まれている。」こうした団体を志向する以上、プリムローズ・リーグがメンバーシップに高いハードルを設定することは適切とは考えられなかった。実際、メンバーになるための条件は、次の誓約に同意することに限定された。「名誉と信念にかけて、私は、宗教、国制、われらが君主の下に統合されたブリテン帝国の護持のために、自分のもてる最高の能力を捧げることを誓う …そして、わが国の女王への忠誠心につけて、分別と信心をもって、私は上記の目的、すなわち、プリムローズ・リーグの目的を推進することを誓う。」つまり、エリートの準秘密結社などではなく、あらゆる階級の者たちに門戸を開いたポピュラーな公然団体として、プリムローズ・リーグは自己成型していったのである<sup>50)</sup>。

1883年12月17日には、『モーニング・ポスト』や『タイムズ』をはじめとする有力新聞各紙に以下のような広告が掲載され、プリムローズ・リーグの存在は完全に公然のものとなった。「プリムローズ・トーリ・リーグへの加入を希望するジェントルマンは、プリムローズ・リーグの登録係まで書面で申請されたし」<sup>51)</sup>。同日の『モーニング・ポスト』論説は、この新しい政治団体を以下のように性格づけている。

議会内外の指導的なコンサヴァティヴの導きの下に設立されたこのソサエティは、独自の活動に努めることとともに、他のあらゆる保守党系団体との協力を進めることを意図している。リーグの目的は、「宗教、国制、グレート・ブリテンの帝国覇権の護持」と規定されたトーリの諸原則を促進することである。リーグのモットーは Imperium et Libertas であり、リーグのバッジやシールにはプリムローズがあしらわれている。リーグはビーコンズフィールド卿の愛国的言語と活動目標を採用し、それを継承していくことを目指している。…

40年前に *Coningsby* や *Sybil* において予期されていた高貴な者と労働者の連帯は、今や確立済みの事実となった。プリムローズ・トーリ・リーグはこのことの証左である。リーグはビーコンズフィールド卿のキャリアを貫いてきた教えを提唱する団体なのだから<sup>52)</sup>。

その社主と編集長が設立に関与したプリムローズ・リーグをバック・アップする姿勢を鮮明にしていた『モーニング・ポスト』の論調には、〈ディズレイリの遺志を継ぐ政治団体〉としてプリムローズ・リーグを印象づけようという意図がはっきりと認められる。プリムローズ・リーグは、ディズレイリをコメモレイトする団体と性格づけられたのである。

チャーチルによるノースコートへの批判を概して好意的に報じてきた『タイムズ』であるが、『モーニング・ポスト』とは対照的に、プリムローズ・リーグについて当初はかなり突き放した見方をした。1883年12月17日の『タイムズ』論説によれば、プリムローズ・リーグはノースコートの指導力に対してくすぶっていた保守党内の苛立ちの表現、こうした苛立ちの「無害なはけ口」に他ならなかった。「プリムローズ・トーリ・リーグは、もちろん、ビーコンズフィールド卿を記念して設立されたのであり、その理念はビーコンズフィールド卿に合致したものだだろう。しかし、今日の政治は、こうした気まぐれな夢想にとって、あまりに深刻かつ現実的である。」プリムローズ・リーグを〈ディズレイリの遺志を継ぐ政治団体〉を意図したものとして把握する点では、『タイムズ』も『モーニング・ポスト』に同調するわけだが、その政治的重要性については、さしたる期待は表明されない。「…急進主義者がわが国を革命という奈落の崖っぷちにまで引きずりこんでいると「トーリ」が本気で考えているのであれば、彼らには「プリムローズ・リーグ」の設立よりももっと緊急で重大な果たすべき作業が間違いなく存在する。」<sup>53)</sup>

たしかに、設立されたばかりのプリムローズ・リーグの将来を見通すことは、この時点では難しかったに違いない。12月17日の広告は「ただちに人々の好奇心と関心をかきたてた」と事後的にいわれているし、『モーニング・ポスト』も楽観的な展望を明らかにしてはいる。「最近発足したばかりのリーグは、既にわが国の多くの地域に拠点を獲得した」<sup>54)</sup>。とはいえ、ウォルフが構想するようなポピュラーな団体になるまでには、プリムローズ・リーグの性格にいくつかの重大な変更を加えることが必要であった。この点に関する検討は第5節に譲りたい。

#### 4 プリムローズ・デイの定着：浸透と〈大衆化〉

1883年4月19日にはほぼその原型を確立させたプリムローズ・デイは、1880年代を通じ、総じて順調に定着していった。4月19日にディズレイリを偲ぶイベントを開催すること、イ

ヴェントに際してはプリムローズが重要な小道具として利用されること、この2点に関して広範な合意が形成されていったといつてよい。そして、1884年以降、ロンドンにおけるそれをはじめ、プリムローズ・デイにちなむイベントの多くを主導してプリムローズ・デイの定着に大きな役割を果たしたのはプリムローズ・リーグであった。設立後初の1884年のプリムローズ・デイに向けて、プリムローズ・リーグ指導部は充分な量のプリムローズを調達するための手配を1ヶ月以上前から開始し、この花に彩られた4月19日のコメモレイションを重視する姿勢を明示している。こうした早くからの準備が必要になるほど、着用や飾りつけのためにプリムローズを用いることが広がりを見せてもいた。たとえば、1884年3月20日の『モーニング・ポスト』に掲載されたコヴェント・ガーデンの花屋（Lewis, Solomon, and Co.）の広告は、「ビーコンズフィールド卿の命日、プリムローズ・デイに向けた需要の急増」に鑑み、早めの注文を呼びかけるとともに、「家庭やクラブ、劇場やレストラン、ホテルの飾りつけのための大口の注文には応じきれないかもしれない」ことを警告している。あるいは、1886年4月20日の『タイムズ』にも次のようにある。「昨日、首都の各地においてプリムローズの需要は大きかった。とりわけシティの花屋は、この需要に対処しようと大変な努力を払った。」こうした中、プリムローズ・リーグ指導部も特定の花屋との間に契約を結んで、プリムローズの確保に万全を期した。さらに、4月19日にかかわるプリムローズ人気（供給不足）はビジネス・チャンスをも提供したようで、1880年代のうちにはプリムローズ・バッジなる商品も登場した<sup>55)</sup>。

プリムローズ・デイの浸透は、意外な方向からの批判を招くことにもなった。「イングランドの野生の花を愛する者たち」からのそれである。1889年4月、『パース・クロニクル』に掲載された手紙は、「プリムローズとラップスアイセンの無茶な摘み取りに抗議」し、プリムローズ・デイへの警鐘を鳴らしている。

最も危機的なのはプリムローズです。あるいは少なくとも、プリムローズ・デイが近づいてくると、亡きビーコンズフィールド卿の記憶のせいで、独特の色と素晴らしい香りのこの愛すべき野生の花が根絶されてしまうのではないかと心配する気持ちを、私たちは強くするのです。たくさんの詩人がこの花を称えて詩を詠ってきました。…プリムローズのような愛らしい森の花が政治的なバッジにされてしまったことを私が嘆いたとしても、急進主義者であるとして私を非難する人などいないと信じます。プリムローズの花輪で絵画や銅像を飾るというテイストには、議論の余地があるのではないのでしょうか？<sup>56)</sup>

こうした批判にもかかわらず、以下で述べるように、プリムローズ・デイにディズレイリ像をプリムローズで飾りつける悪趣味ともいえる慣習は、〈見物人〉を集めるほどの人気を博すことになる。

プリムローズは個々人によって着用され、クラブやレストランのデコレーションにも利用されたわけだが、プリムローズ・デイにあたり、それが最も集中したのはウェストミンスターのディズレイリ像およびその周辺であった。ディズレイリ像をプリムローズによって飾りつけることが恒例化していくのである。早くも「これまでの年と同じように」というフレーズを伴いながら、1886年4月20日の『タイムズ』は、多くのプリムローズの花輪に取り囲まれるとともに、プリムローズによってさまざまなデザインを施されたディズレイリ像が「きわめて大きな関心の対象」となったことを伝えている。趣向をこらして飾りつけられるディズレイリ像は人々の興味を惹き、プリムローズ・デイには、プリムローズ・リーグやコンサヴァティヴ・クラブのメンバーのようなディズレイリをいわば信奉する者ばかりでなく、より広範な人々がプリムローズを手にディズレイリ像を訪問するようになる<sup>57)</sup>。4月19日にプリムローズが「大変に広く着用され」、ディズレイリ像が「地方から送られたものも多く含めて、プリムローズ、ローレル、アイヴィの花輪に取り囲まれ」、「銅像の周囲の芝がプリムローズに覆われて分厚いカーペットのようになる」のは、「恒例の光景」と化していくのである。なお、この引用に見られるように、ディズレイリ像に捧げられる、あるいは銅像の飾りつけに用いられる花はプリムローズには限られず、たとえば1889年の場合はむしろヴァイオレットが多かった。それでも、着用の対象となるのはあくまでもプリムローズだけであり、〈ディズレイリの好きな花〉の特権的な地位が脅かされることはなかった<sup>58)</sup>。また、4月19日のディズレイリ像を彩るプリムローズの多くは自発的に届けられ、特に著名人からのそれでない限り、ごく無造作に像や台座の周辺に置かれたと思われるが、ディズレイリ像そのものに直接かかわる飾りつけについては、プリムローズ・リーグのグラランド・カウンスルやレディズ・グラランド・カウンスル（ないしその執行委員会）<sup>59)</sup>が責任をもった。

人出という点では比較にならないものの、ロンドンと並んでプリムローズ・デイのもう1つの焦点を成した場所がヒュンデンである。プリムローズ・デイの慣習の重要なきっかけとなった女王からの2つの花輪（プリムローズのそれと別の花のそれ）は、毎年欠かさずヒュンデンに届けられつづけ、ヒュンデン教区の司祭の妻、ブラグデン夫人がディズレイリの墓に捧げることが恒例となった。1889年のプリムローズ・デイに贈られたプリムローズには、「ヴィクトリア女王から感謝を込めた追悼の印に」ということが添えられていたという。プリムローズは女王とディズレイリの親密さをシンボライズする表象でありつづけたのである。また、既に1882年の時点でも見られたことだが、女王以外の人々もヒュンデンにプリムローズを届けるようになっていく。1884年には、「教区司祭のブラグデン氏が多くの個人やソサエティから十字架や花輪を受け取った」ことが、1887年には、「月曜[4月18日]の夜、ビーコンズフィールド卿の墓の周囲に置かれるために、多くの花輪がパディントンからヒュンデンに発送された」ことが、各々報道されている。差出人は、プリムローズ・リーグやコンサヴァティ

ヴ・クラブのメンバーから単なる個人まで、さまざまであった<sup>60)</sup>。

さらに、ディズレイリの命日にあわせてなんらかのイベントを開催することは、ロンドンやヒュンデンだけでなく、アイルランドを含む連合王国各地に広がっていった。「バーミンガムのような急進主義の拠点さえ、ビーコンズフィールド卿の死をメモレイトする流行の方法を採用する点では、ロンドンにほとんどひけをとっていないようである」<sup>61)</sup>。たとえば、1887年のプリムローズ・デイにリヴァプールで開かれたデモンストレーションは4～5万人を動員する大規模なものであり、この動員力と「日中に街で出会った人のおよそ半数がプリムローズを身につけていた」という雰囲気とは、明らかに連動していた<sup>62)</sup>。1888年4月20日の『タイムズ』論説は、プリムローズ・デイをめぐる全国の町や村が競争する事態を指摘する。「今年のプリムローズ・デイはこれまで以上に広範かつ心を込めて祝われた。各地からもたらされる情報は、実質的にはどれも同じ内容のものである。この日の恒例のデモンストレーションに関して遅れをとらないよう、町や村は互いに競い合っている。」<sup>63)</sup> ヒュンデンの葬儀に端を発し、ロンドンの銅像除幕式によって勢いを得たプリムローズ・デイの慣習は、着々と〈ナショナル〉を標榜しうだけの広がりをもつ記念日になっていったのである。1888年5月の時点で、プリムローズ・リーグの機関紙『プリムローズ・リーグ・ガゼット』は自信満々に断言している。「…ブリテン国民のアイドルが、このネイションに名誉と尊敬をもたらすために人生を費やし、忠誠で帝國的で反共和主義的なすべてのものとその名前が同義になっている1人の人物であり、最もポピュラーな記念日がプリムローズ・デイであるという事実は厳然としている。」<sup>64)</sup>

プリムローズ・デイはプリムローズの〈伝説〉を改めて語る機会を提供したから、その慣習の定着は〈伝説〉のストーリーの浸透を促す効果をもった。もともと必ずしも確実とはいえない根拠に基づく〈伝説〉であり、たとえば1888年4月20日の『タイムズ』論説には、プリムローズ・デイという「喜ばしい伝統」の根拠である「プリムローズがビーコンズフィールド卿の好きな花だったという考え」には「ごく薄弱な事実の裏づけしかない」という一節が含まれていたりもした<sup>65)</sup>。しかし、プリムローズ・リーグの幹部のような〈伝説〉の信憑性にこだわらざるをえない人々を別にすれば、毎年のプリムローズ・デイで反復される〈伝説〉の語りは総じてこうした疑念を一蹴し、〈伝説〉の受容を促進させる機能を果たした。1884年1月24日の『モーニング・ポスト』に寄せられたプリムローズ・リーグについての詩に含まれている、「イングランドの教会を、イングランドの女王を守るために、われわれはやってきた。バナーやシールドに、ビーコンズフィールドの花を掲げて」、「戦いが終わり、この領土に再び名誉が輝いたなら、誇り高き老ライオンのたてがみの周りに、平和の中でわれわれはプリムローズの鎖を紡ぐだろう」、といった部分の意味するところは、それを支持するか否かはともかく、少なからぬ読者にとって明瞭になっていったと考えられる<sup>66)</sup>。

毎年のプリムローズ・デイにかなりの規模の人出を期待できることが判明すると、単にディズレイリを追悼・顕彰するだけでなく、時々の政治的なトピックを持ち込もうとする動きも出てくる。これはプリムローズ・リーグの意図するところでもあった。「この〔プリムローズ・デイの〕機会を正当な党派的目的のために利用しようとするあらゆる努力が、リーグの側では行われてきた。」<sup>67)</sup> とはいえ、命日という場の性格に伴う制約もあって、政治的なトピックの導入はごく控えめであった。たとえば、アイルランドへのホーム・ルール付与をめぐる対立が先鋭化していた 1886 年、少なからぬ人々がホーム・ルール反対の意味を込めてプリムローズを着用したと『タイムズ』は報道しているが、ディズレイリ像に直接かかわる範囲でいえば、プリムローズにホーム・ルール反対を記したカードを添えるのがせいぜいのところであった。もっとも、プリムローズ・デイにあわせて（通常この日の夜に）政治的なデモンストレーションが開催されることは珍しくなく、命日から一線を画した場になれば、政治的なトピックを持ち込むことへの躊躇は見られなかった<sup>68)</sup>。

1888 年のプリムローズ・デイに寄せた『タイムズ』論説は、プリムローズ・デイの慣習の広がり、町や村に見られるデモンストレーションの競争、4 月 19 日を政治的に利用しようとするプリムローズ・リーグの姿勢、等を指摘したうえで、「ポピュラー・マインドに対してプリムローズ・デイが帯びている意味合い」について以下のように論じている。

プリムローズはコンサヴァティヴ・エンブレムとなった。しかし、昨日プリムローズを身につけた多くの人々は、自分のことをコンサヴァティヴだとさえ思っていない人々である … ボタンホールにプリムローズを挿すのは、4 月 19 日がやってきた時にはするのが正しいことである。これは、コンサヴァティヴにとってだけでなく、コンサヴァティヴでもリベラルでもなく、他の人々がしていることを自分もすることに関心がある中立的な人々全員にとっても承認済みのルールである。人間は模倣をする動物である。そして、プリムローズ・デイは模倣をするのが非常に簡単で、しかもそれ自体として非常に魅力的な儀式をもたらしたのである … ある者はビーコンズフィールド卿のためにプリムローズを身につけ、またある者はプリムローズ自体のためにプリムローズを身につける。結果的には、ほとんど誰もがプリムローズを身につけるわけである。プリムローズは党派のシンボルであり、それはパーソナル・カルトを象徴している。そして、それは愛らしい花である<sup>69)</sup>。

これ以降のプリムローズ・デイの展開（年中行事としての定着・拡大、プリムローズを着用する者のディズレイリ信奉者と〈見物人〉への二極分化）を予見する重要な指摘が含まれた論説といってよい。プリムローズ・デイの慣習が広まり、定着するとともに、ディズレイリを追悼し、その政治路線を賛美するという当初の狙いからの逸脱が生じ、政治的意味は希薄化されていく。プリ

ムローズ・デイの〈大衆化〉である。コンサヴァティズムの立場からディズレイリを〈横領〉しようとする者たちだけでなく、年中行事としてプリムローズを着用したりディズレイリ像の飾りつけを見たりすることを楽しみにする者たちがさらに多くいてはじめて、プリムローズ・デイは暦の中にたしかな位置を占めえた。プリムローズを着用するという行動自体は、たしかに誰にでも容易に「模倣」できたし、春の本格的到来を「愛らしい花」とともに祝うという意味で「魅力的」でもあり、このことが後者のような人々を幅広く動員できる要因となった。いったん慣習が広く浸透してしまえば、そこになんらかの魅力が認められる限り、政治的意味とはまったく別に、ますます多くの者たちの「模倣」の欲望が刺激されることになる。ここで涵養されているのは、1884年4月19日の『タイムズ』論説が指摘したように、「ビーコンズフィールド卿の記憶への熱烈で排他的な帰依とは異なるテイスト」である。「たとえ、プリムローズになんらかの政治的意味を付与できない者であっても、ボタンホールにプリムローズを挿すことを恥ずかしがりはいない」。こうした現象は「あらゆるカルトや信仰全般によくあること」であった。しかし、同時に、プリムローズ・デイの広がりにはディズレイリと結びついたコンサヴァティヴ・エンブレムというプリムローズの含意に関する広範な認知をもたらしたから、ディズレイリへの「英雄崇拜ないし聖人崇拜」とは一線を画す者たちが着用する場合であっても、客観的にはコンサヴァティズムを促進する意味をもちえた<sup>70)</sup>。ディズレイリの命日という基本が揺るがない限り、プリムローズ・デイは政治的に中立ではありえないのである。つまり、年中行事化していくプリムローズ・デイは、政治的意味を薄めつつもそれを完全に喪失することはないまま、多くの人々をいわば〈無自覚なコンサヴァティヴ〉として動員する機会を提供していたことになる。1880年代に目撃されたプリムローズ・デイの定着の内実は、こうしたものであった。

## 5 プリムローズ・リーグの成長：〈ナショナル〉な政治団体

『モーニング・ポスト』がプリムローズ・リーグを〈ディズレイリの遺志を継ぐ政治団体〉として印象づけようとしたことは上述の通りだが、こうした姿勢はプリムローズ・リーグの設立にかかわった誰もが共通してもつものであり、プリムローズ・リーグの歴史を通じて、ディズレイリの名は繰り返し〈横領〉された。たとえば1885年4月18日、チャーチルは、プリムローズ・リーグは「ビーコンズフィールド卿の死が喚起した感情と、そのキャリアを知ることによってかきたてられた思いを、政治的エネルギーに転換したもの」に他ならないと述べている。ボースウィックが1886年に発表した文章もまた、次のようにいう。「ビーコンズフィールド卿の記憶が愛でられる際の尊敬の念にアピールすれば、容易にリクルートを獲得できるだろうと信じるに十分な根拠があった。政治家として、驚くべき政治的本能に恵まれていた彼が触



れた心の琴線は、彼が死んでも振動を止めなかった。…ベンジャミン・ディズレイリの記憶が深い感情とともに人々の胸に抱かれていることは、毎年彼の命日である4月19日にあらゆる階級の膨大な数に上る人々がプリムローズを身につけることによって、目に見えるかたちで示されていた。」プリムローズ・リーグの目的は、「生前のビーコンズフィールド卿の目的であり、彼を追憶するわれわれによって遂行される」ものだというのである。プリムローズ・リーグが発行したパンフレットにおいても、「帝国主義者にして民主主義者であった偉大な政治家ベンジャミン・ディズレイリの伝統を維持していくため」の団体、「ビーコンズフィールド卿のトーリ民主主義という偉大な政策にインスパイアされた」団体、といった自己規定が施された<sup>71)</sup>。

〈ディズレイリの遺志を継ぐ政治団体〉とのイメージづくりに際し、プリムローズ・リーグによって大いに活用されたのが、〈ディズレイリの好きな花〉＝プリムローズという表象である。プリムローズ・リーグのシールやバッジ、リボン、等にはほぼ例外なくプリムローズがデザインされた。そして、その規約に「支部のあらゆる会合においてバッジが着用されねばならない」「プリムローズ・デイにはリーグの全メンバーはプリムローズの花を身につけなければならない」とあるように、プリムローズ・リーグはプリムローズをできるだけ人目に触れさせようという意図をはっきりともっていた<sup>72)</sup>。1892年10月になると、大げさなバッジ等は着用しにくい日常生活の場面でもブローチやピンとして利用できるようにという狙いから、エナメルของプリムローズがグランド・カウンシルによって製作・販売された。また、プリムローズのモチーフを使った文具、登録簿、写真立て、バラソル、といったグッズも商品化された。

(図版①)<sup>73)</sup>

これだけ旺盛にプリムローズの表象が活用されたのは、その効果についての積極的な手応えがあればこそだった。たとえば、ニセモノが横行するほどの人気を集めたプリムローズ・バッジの効用について、1888年6月2日の『プリムローズ・リーグ・ガゼット』論説は、バッジは「プリムローズ・リーグの拡大と力の有力な要因」であると論じている。「きわめて多くの場合、プリムローズ・バッジを隣人が着用している光景は、最も優秀なアドレスや最も雄弁なアピール以上



図版① プリムローズを象ったグッズの一例。1886年にプリムローズ・リーグが発売したプリムローズ・プレート。Langley, *op. cit.*, p. 150.

に効果的にリクルートを獲得する」<sup>74)</sup>。20世紀に入っても、同じような議論が展開された。「プリムローズは、決して馬鹿にできないエンブレムの力を示してきた。バッジ好きはナショナル・キャラクターの問題であって、単一の階級やコミュニティに限定されない。」<sup>75)</sup> プリムローズという表象を得たことは、〈ディズレイリの後継者〉イメージの戦略にとってだけでなく、プリムローズ・リーグが多くのメンバーを獲得するにあたってもきわめて重要だったのである。チャーチル夫人の回想によれば、「[プリムローズを象った] バッジを着用することで、私たちは、嘲りとまではいわないにせよ、大いに冷やかされた」。したがって、当初はプリムローズの着用を躊躇するメンバーも少なくなかったが、それがプリムローズ・リーグの前進にとって有効であることを認識したがゆえに、「私たちはそれを貫いた」のだった<sup>76)</sup>。つまり、プリムローズ・リーグは、プリムローズ着用の慣習を広めることを意識的に追求していたのである。

とはいえ、プリムローズ・リーグがウォルフの意図したようなポピュラーな団体となるためには、プリムローズのロマンティシズムを活用するだけでは充分ではなかった。実際、チャーチル一派の団体として当初はかなり警戒されたせいもあり、プリムローズ・リーグの前進ははかばかしくなく、1884年4月の時点で支部の数は46にすぎなかった。こうした初期の停滞は比較的早期に克服されるが、そのプロセスは、以下に見る通り、チャーチルが当初描いていたエリートの準秘密結社といったイメージから現実のプリムローズ・リーグが離反していくプロセスに重なっていた<sup>77)</sup>。

設立から間もない1883年12月、プリムローズ・リーグの性格を変える最初の重要な決定がくだされた。ウォルフのイニシアティヴの下、チャーチルの反対を押し切ったことで、女性をメンバーとして受け入れることにしたのである。当初はあくまでも名誉メンバーとしての受け入れであったが、1884年に入ると、男性と同等のステータスが認められる。この決定についても、プリムローズ・リーグはディズレイリのインスピレーションを持ち出した。「ピーコンズフィールド卿の最後の小説[政治への女性の影響を扱った *Endymion* を指す、つづく *Falconet* は未完に終わった]には、政治にかかわるレディという主題に関するはっきりとした意見表明が見られる。」<sup>78)</sup> たしかに、ディズレイリは女性参政権に関してある程度のシンパシーを示す人物ではあったが、現実の政策アジェンダにこの問題を載せることにはまったく積極的でなかったから、プリムローズ・リーグの議論はこじつけに近いディズレイリの〈横領〉といえる。ディズレイリが長年党首を務めた保守党が女性党員をようやく許容するようになるのは、1918年国民代表法の成立以降のことである。他の政治団体にしても、女性を拒否するか、あるいは自由党系のウイメンズ・リベラル・フェデレイション（1887年設立）のような別組織に分離するのが通例だったことを考えれば、プリムローズ・リーグの新方針は特筆に値する。1885年刊の自由党の『ハンドブック』は、おそらくは当時の標準的な考え方から、女性

の「無知と浅薄な虚栄心」にアピールしようとしているとプリムローズ・リーグを批判しているし、有力な自由党議員だったヘンリ・ラブーシェアは、1886年1月22日、「美しい人もいれば、そうでない人もいるプリムローズ・リーグのデйм」が実践する「テロリズム」はアイルランドにおけるそれよりも悪質であると発言し、女性の政治活動を嘲る姿勢をはっきりと見せている。それでも、受け入れ決定に対する女性たちの反応は目覚しかった。やがてメンバーの半数近くを女性が構成することになるのであり、プリムローズ・リーグが成功した最大の理由を女性受け入れ方針に見出す評価もある。実際、初期のプリムローズ・リーグが注目を集めたのは、なによりも一世を風靡した「プリムローズ・デйм」の活躍を通じてであった<sup>79)</sup>。

重要性において劣らないと思われるのが、アソシエイトという新しいメンバーのカテゴリーを設定したことである（1885年3月以前は男性はエスクワイア、女性はコンパニオンと呼ばれた）。この決定は1884年3月にくだされた。下層の民衆がリーグに関心を示していることを察知したスレイドがこの決定の推進者だったが、これもまたチャーチルの当初の狙いに反するものであった。設立当初のプリムローズ・リーグにはナイトというメンバーシップしか存在せず（その後、同等のステータスの女性カテゴリーとしてデймが加わる）、その会費（1ポンド1シリングの年会費と半クラウンの入会金）は、ポピュラーな団体を意図するに足るあまりにも高額であった。新たに付加されたアソシエイトの会費は一律ではなく、各支部に決定が委ねられたが、ナイトやデймのそれに比べて非常に低く設定されるのが常だった（3ペンスないし6ペンスの場合が多い）。明らかにエリートとは正反対の者たちをターゲットとしたカテゴリーであり、実際にアソシエイトは圧倒的に労働者によって構成された（1886年の報告では90%）。1901年の時点であれば、約150万人のメンバーのうち、140万人はアソシエイトだった。アソシエイトとして加入してきた労働者たちこそが、「リーグの背骨」となったのであって、こうした反応にはプリムローズ・デイの浸透も一役かっていたと思われる。上述した『モーニング・ポスト』の指摘にあったように、ディズレイリが「高貴な者と労働者の連帯」を望んでいたのだとすれば、プリムローズ・リーグがディズレイリの望みを実現しえたのは、ナイトおよびデймとアソシエイトから成る二重のメンバーシップ制度があればこそだった。しかも、少なくとも支部の運営に関する限り、アソシエイトにはナイトやデймとのかたちのうえでは同等の権利が与えられた。アソシエイトは単なる追従者としてではなく、積極的に活動を推進すべき主体として迎えられたのである。1880年代に組織担当セクレタリを務めたクロード・G. ヘイは、女性とアソシエイトの受け入れに転じた時こそが初期のプリムローズ・リーグの歴史の決定的な転換点であったと論じている<sup>80)</sup>。

初期の変更としてもう1つ見落とせないのが、1884年2月に名称から「トーリ」の単語を外したことである。プリムローズ・リーグが保守党系の団体であることは否定すべくもなかったし、実際に保守党の政策をほぼ例外なく擁護するのだが、「トーリ」と称さなくなることで、

少なくとも形式的には党派の壁をこえ、さまざまな政治信条の持ち主を歓迎する姿勢を示すことが可能になった<sup>81)</sup>。メンバーの幅を広げるうえで、この変更がプラスに作用したことは間違いない。超党派的なポーズを示すことによって、上述したような〈ナショナル・ヒーロー〉としてのディズレイリのイメージづくりに、〈ディズレイリの遺志を継ぐ政治団体〉らしく同調したと見ることもできる。さらに、〈ナショナル〉な団体を目指すプリムローズ・リーグは、少なからぬカソリックをもメンバーに擁していた。この時代の保守党がイングランド国教会と強く結びついていることは誰の目にもはっきりしていたし、1850-60年代以来、アイルランド人移民への反感とそれに対応する戦闘的なプロテスタンティズムが保守党を利してきたわけであるから、「トーリ」を名に冠する限り、カソリックがプリムローズ・リーグに加わることは困難であったに違いない。アイルランドへのホーム・ルール付与の是非が政治的焦点となる時代において、プリムローズ・リーグがカソリックを引き寄せる可能性を確保し、実際に少なからぬ有力なイングランド人カソリック（たとえばノーフォーク公爵）がこの団体で重要な役割を担ったことは、カソリック、あるいはアイルランド人に敵対する団体であるというイメージを弱められたという意味で、小さくないアドヴァンテージだった<sup>82)</sup>。

当初は嘲りや警戒の対象となったプリムローズ・リーグが保守党指導部に認知されたのは1884年7月のことで、同年12月にプリムローズ・リーグの代表団がソールズベリおよびノースコートと会談した際には、2人がプリムローズ・リーグの設立宣言に署名を寄せた。12月22日の『モーニング・ポスト』は、「リーグの子ども時代の歴史の最終章として、今や党指導部との間に公式の関係が成立したと見なしてよいだろう」と述べている。このことがきっかけとなって、両院の院内総務をはじめ少なからぬ保守党議員たちがグランド・カウンシルに加わり、ソールズベリとノースコートにグランド・マスター（形式のうえではプリムローズ・リーグの最高指導者のポスト）の称号が贈られて、プリムローズ・リーグと保守党は完全に蜜月状態に入る。両者の関係をさらに強化することになったのが1885年総選挙の経験であり、プリムローズ・リーグの組織力が保守党にとってきわめて重要であることが知らしめられた。総選挙直後の1886年1月18日、グランド・カウンシルに宛てた手紙の中で、ソールズベリはこう述べている。「選挙という目的に向けて保守の世論を組織することにかかわるプリムローズ・リーグの価値は、どんなに高く評価しても高すぎるということはまずないでしょう … プリムローズ・リーグが急進党〔自由党を指す〕の幻想を覆すための強力なエイジェントとなることを、私は疑いません。」1883-85年の諸改革（腐敗行為防止法、選挙権拡大、議員定数は正、議席再配分）を経た新しい選挙制度の下で生き残っていくためにはプリムローズ・リーグが必要であることを、多くの保守党指導者が認識するようになったのである<sup>83)</sup>。

女性の受け入れ、労働者向けカテゴリーの設定、「トーリ」を外す名称変更、等と、保守党指導部による認知とが相まって、設立当初のプリムローズ・リーグが直面した停滞状況は克服

プリムローズ・リーグの勢力 (1884-1910 年)

	ナイト	デイム	アソシエイト	合 計	支 部
1884, 29 March	747	153	57	957	46
1885, 31 March	8,071	1,381	1,914	11,366	169
1886, 31 March	30,206	21,365	149,266	200,837	1,200
1887, 31 March	47,234	36,800	442,214	550,508	1,700
1888, 31 March	54,580	42,791	575,235	672,616	1,877
1889, 31 March	58,180	46,216	705,832	810,228	1,906
1890, 31 March	60,795	48,796	801,261	910,852	2,081
1891, 31 March	63,251	50,973	887,068	1,001,292	2,143
1901, 31 March	75,260	64,906	1,416,473	1,556,639	2,392
1910, 31 March	87,235	80,038	1,885,746	2,053,019	2,645

(Pugh, *The Tories and the People*, p. 27, p. 168 ; Robb, *op. cit.*, p. 228)

された。メンバーと支部に関する数値は上に掲げた表の通りである。一見して明らかなように、プリムローズ・リーグの組織的前進を支えたのは、なによりもアソシエイトの大量流入であった。プリムローズ・リーグは、少なくとも数のうえでは労働者が主流を構成する、まごうかたなき大衆組織だったのである。また、ナイトとデイムに関する限り、男女比は着実に1対1に接近しており、同様の傾向はアソシエイトについても存在したものと推測される。数値に若干の誇張があることは事実であるが、プリムローズ・リーグこそが「同時代で最も大きくかつ広まった政治組織」であったことは、おそらく否定できない<sup>84)</sup>。

〈ナショナル・ヒーロー〉がインスピレーションの源泉であることを自称するプリムローズ・リーグの勢力地図を、各地方の1選挙区あたりの平均メンバー数 (1885-93年) を指標としてまとめると、以下ようになる。ウェセックス (2,604人)、東ミッドランズ (2,467人)、南東イングランド (2,368人)、中部イングランド (2,167人)、南西イングランド (2,012人)、ウェイルズ (1,771人)、イースト・アングリア (1,757人)、西ミッドランズ (1,699人)、北西イングランド (1,666人)、北イングランド (1,601人)、ヨークシア (1,395人)、ロンドン (886人)、スコットランド (826人)。組織的に別枠だったスコットランドを棚上げしたうえでいくつかの特徴を確認するなら、なによりも目につくのは、都市よりも農村において強固な拠点が築かれており、逆にロンドンでの勢力が相対的に弱いことである。暫定的な見通しでしかありえないが、おそらくプリムローズ・リーグは、競合するエンタテインメントが少なく、住民の流動性が低い (したがって、地主や名望家の社会的影響力が強い) 環境の中で、最も成功しやすかったと思われる。エンタテインメントの機会を提供することを主要な武器としていたプリムローズ・リーグのような団体にとって、洗練されたエンタテインメントが多様に存在し、シティ・センターの居住者が安価な住居を求めて絶え間なく移動するロンドンは、さまざまなアソシエーションが乱立していたこととも合わせて、困難な条件を突きつける都市だったのだろう。また、保守党議員がきわめて少ないウェイルズのような地方にかなりの浸透が見られたことも注目に値する。しかし、地理的な偏差はあるものの、なによりも特筆すべきは、社会的環境を問わず、プ

リムローズ・リーグが国内のほとんどの地方に支部を築いていたことではないかと思われる。これだけの勢力を有するプリムローズ・リーグにとって、〈ナショナル〉な地理的広がりを誇ることは決して見当違いではなかったのである<sup>85)</sup>。

プリムローズ・リーグが見せたこれほどの成長は、チャーチルやウォルフのような設立の中心メンバーの予想さえ大きく上回るものであった。1888年6月16日の『プリムローズ・リーグ・ガゼット』論説は以下のようにいう。

明らかに、彼ら〔創立者たち〕はプリムローズ・リーグが70万のメンバーを擁するようになるとは夢にも思っていなかった。実際、リーグが王国で最も強力なアソシエーションになることなど、彼らは一度として願ったことはない。ブリテン国民の胸中にあると彼らが信じていたビーコンズフィールド卿の政策を導いた諸原則に対する心からの崇敬を惹きつけ、組織できさえすれば、それでリーグの創立者たちの最大の志は達成され、彼らのミッションは果たされたはずである。それ以上先に飛躍することを、彼らは提唱しなかった<sup>86)</sup>。

プリムローズ・デイが暦の中に定着していくのと軌を一にして、ディズレイリのためのもう1つのコモレイションのあり方であったプリムローズ・リーグも、同時代の政治的風景を変えうるだけの力をもった政治団体へと成長を遂げたのである。プリムローズ・デイの〈大衆化〉と同じく、プリムローズ・リーグの大衆組織への成長も不可避免的に当初の政治的性格の希薄化を招くわけだが、プリムローズ・リーグのその後の展開も含め、この論点については改めて別稿を用意する必要があるだろう。

## 6 ディズレイリの語られ方：〈ナショナル・ヒーロー〉の造形

少なくとも1880年代に関する限り、ディズレイリをコモレイトすることを名目とした2つのまったく形態を異にする企て、プリムローズ・デイとプリムローズ・リーグは大成功を収めたといってよい。多くの人々にアピールしようと試みる者たちに対し、ディズレイリは充分すぎるほどの〈横領〉のポテンシャルを秘めていることを示したわけである。いうまでもなく、〈横領〉の過程ではディズレイリにまつわるある側面がクローズ・アップされ、また別の側面は隠蔽されていく。当然の歪みを伴いつつ、ある特定の方向性において展開されたディズレイリの〈横領〉が功を奏したからこそ、プリムローズ・デイとプリムローズ・リーグは多くの人々の支持を獲得できたのである。以下では、主としてプリムローズ・デイにかかわる場面（1880年代に限定せず、やや長いタイム・スパンを採る）でのディズレイリの語られ方を手がかりに、

ディズレイリがいかなるイメージの存在として造形されていったのかを検証してみたい。

ディズレイリ像除幕式の式次第や演説、そして除幕式直後の『タイムズ』や『モーニング・ポスト』が、〈ナショナル・ヒーロー〉としてのディズレイリというイメージの構築を明らかに試みていたことは、既に第2節で指摘した。そこで描かれたのは、〈イングランド的なキャラクターを体現し、イングランド全体のために献身したディズレイリ〉、〈党派や階級、地域をこえてネイション全体の追悼・愛惜の対象となっているディズレイリ〉であった。ここにいう〈ネイション〉は、多くの場合、イングランドのみを指す文脈で登場するが（したがって、〈ナショナル〉と〈イングリッシュ〉はしばしば互換可能だが）、時にブリテンあるいは連合王国全体やさらには帝国植民地の人々をも含めた〈ナショナル〉なディズレイリ追悼が語られることもあった。そして、〈ナショナル・ヒーロー〉たるディズレイリはピールやパーマストンと差異化され、彼の記憶は将来にわたってとりわけ長く保たれるだろうとの見通しが示された。

こうした論調はその後もつづいた。『タイムズ』に即していえば、たとえば1884年のプリムローズ・デイの際には、「ネイションの心には … 依然として大きな悲しみの感情が残っている」「イングランドは自分たちがどんなにこの人物を好きだったか … を理解した」として「ネイションの心」「イングランド」を前面に出し、1891年のプリムローズ・デイを「あらゆる階級がこのセレブレーションに合流している」と特徴づけた<sup>87)</sup>。1888年のプリムローズ・デイの様子を伝える『プリムローズ・リーグ・ガゼット』には次のようにある。「… 富者も貧者も場を同じくし、一緒になってメモリアルの足元に敬意の印を投げた … 時には貧しい身なりの見物人が、花束ではなく一輪のプリムローズを投げることもあった … シティでの取引に従事する者たち、ウェスト・エンドのレディたち、馬車を牽く御者たち、バスの運転手たち、使い走りの少年たち、看護婦たち、誰もが同じテイストを示し、結果的にプリムローズへの需要は大きなものとなった。」<sup>88)</sup> また、第4節で見たように、4月19日になんらかのイベントを開催することが全国に広まった結果、プリムローズ・デイは単なる「ロンドンの人々の日」ではなく「ナショナルな関心事」とであると主張することが可能になった<sup>89)</sup>。さらに、プリムローズそのものにも〈ナショナル〉な性格が付与された。「昨日着用されたプリムローズはすべてイングランド産と考えてよいだろう。その多くは、ホーム・カウンティ [ロンドン周辺の諸州]、とりわけケントにおいて、貧者の子どもたちによって摘まれ、ロンドンに急送された」<sup>90)</sup>。ディズレイリを〈ナショナル・ヒーロー〉化するこのような動きが、〈ナショナルな党〉として自らを打ち出そうとするこの時代の保守党のイメージ戦略と志向性を同じくしていたことも、見逃されてはならないだろう<sup>91)</sup>。

ディズレイリを〈ナショナル・ヒーロー〉として描こうとする際に、きわめて効果的な登場人物となったのがヴィクトリア女王である。ネイション全体を代表すると論じられうる唯一の人物との特別に深い結びつきを指摘することで、〈ナショナル・ヒーロー〉のイメージがさら

に強化されるのである。ディズレイリの死の当日、女王が彼の秘書モンタギュ・コーリに宛てた手紙に、「彼ほど忠実な友人は多くありません … これほど鋭く痛みを感じずことは絶えてありませんでしたし、今後もないでしょう」とあったように、あるいは翌日の『マンチェスター・ガーディアン』論説が「女王はビーコンズフィールド卿への気持ちのこもった友情をししばしば表明してきた」と書いたように、実際、女王のディズレイリへの愛着は非常に強いものであり、ディズレイリと女王の親密さを語る根拠は充分にあった<sup>92)</sup>。葬儀の時点で、『タイムズ』は女王が贈ったプリムローズを「献身的なサーヴァントへの女王からの最後の贈り物」と評し、ディズレイリの女王への奉仕とそれに対する女王の高い評価・感謝を印象づけている。1891年4月18日の『プリムローズ・リーグ・ガゼット』論説も、次のように力説する。「イングランドのために彼は生き、女王に奉仕するために彼は神から賜った能力を捧げた。… 公的な場で行われた彼の発言のすべては、女王と … 国への … 情熱的な愛着と献身的な忠誠によって彩られていた。」プリムローズ・リーグにとって、ディズレイリと女王が親しい関係にあったというイメージは政治的に利用価値の高いものであったから、『プリムローズ・リーグ・ガゼット』にはこうしたイメージを喚起するような記事がしばしば掲載された。「ほんの少し前のことだが … ビーコンズフィールド卿のポートレイトは〔ウィンザー城の廊下から〕女王自らの居室へと移された。女王の居室には、女王にきわめて忠実に仕えたこの友人の著作集が置かれていた。」<sup>93)</sup> いうまでもなく、これに加えて、プリムローズの〈伝説〉が繰り返し語られることを通じ、女王とディズレイリが単に君主とその忠臣として信頼関係で結ばれていただけでなく、私的にも愛情のこもった関係にあったという印象が広く浸透させられていく。女王の死（1901年1月22日）後初のプリムローズ・デイに寄せられた詩には、「女王は最期まで彼の思い出を大切にした」という一節が含まれている<sup>94)</sup>。第4節でも簡単に触れたが、このような意味で、1889年のプリムローズ・デイに贈った2つの花輪に添えられた女王のことばは象徴的である。プリムローズの花輪は「感謝を込めた追悼の印」、菊のドライ・フラワーの花輪は「愛情を込めた追悼の印」とされ、前者は公的な意味における2人の関係を、後者は私的な意味におけるそれを象徴していたといえる<sup>95)</sup>。とりわけ2人の私的な結びつきが醸し出す親密な雰囲気は、ディズレイリがある種別格な存在としてのイメージを帯びることを可能にする力をもっていた。

こうしたロマンティックな雰囲気は、たとえば女王が嫌忌していたといわれるグラッドストンには、明らかに無縁のものであった。1898年にグラッドスンが死去した際、女王は彼の遺族に弔意を表する電報こそ送ったものの、「善良できわめて宗教的な人物」であったという以上のコメントはしなかったし、葬儀にかかわるプロセスにもほとんど関与しなかった。葬儀に花を持ち出すことを嫌ったグラッドストンの意向に配慮したためでもあったが、もちろん、プリムローズに類する贈り物もなかった。ディズレイリの死に対するそれとはあまりにも対照的



な女王の姿勢には、一部のジャーナリズムが批判的な論評を行いさえした。また、1900年のプリムローズ・デイの頃には、グラッドストーン像を「パーラメント・スクエア周辺のヴィクトリア時代の偉大な政治家たちの像の間に」設立する計画が持ち上がっていたが、この計画をめぐる、ロンドン・カウンティ・カウンシルのR. W. グランヴィル・スミスは以下のように語って、ディズレイリをグラッドストーンから差異化している。

プリムローズの日はブリテン史に残っていく日になるだろう。プリムローズをエンブレムとする偉大な業績を残した政治家の記憶がこの地で消滅するのは、はるかに先のことであるはずだ。… 今日、人々が訪れた銅像、そして来年以降もビーコンズフィールド卿の命日に人々が訪れつづけるであろう銅像以上に偉大なメモリアルは、どんな人物のものであらうと、ありえない<sup>96)</sup>。

予言の通り、プリムローズの〈伝説〉を通じて女王との特別な関係を誇ることできた〈ナショナル・ヒーロー〉は、たしかにグラッドストーンよりも（ピールやパーマストンよりも）長期にわたって追悼の対象でありつづける。

それでは、上記引用にあるディズレイリの「偉大な業績」とはなんだったのか？ 彼の達成した成果は多岐にわたるが、死後の語りにおいてそれらが満遍なく評価されたわけではなく、コメモレイションの中で圧倒的にクローズ・アップされたのは、〈帝国主義者としてのディズレイリ〉であった。上述した通り、毎年プリムローズ・デイにはディズレイリ像がプリムローズその他で飾りつけられたわけだが、飾りつけに最も頻繁に組み込まれたことばは、単にBと記すそれを別にすれば、おそらく、1878年のベルリン会議でディズレイリが上々の成果を収めた際のキャッチフレーズPeace with Honourと、彼の政治的モットーであったとされるImperium et Libertasの2つ、いずれも帝国にかかわることばであった。(図版②)あるいは、Patriot and Statesmanとデザインされた年もあった<sup>97)</sup>。1885年5月にプリムローズ・リーグのシティ・カールトン支部の宴会で演説したD. プランケット議員はいう。

皆さんが被った喪失の大きさ、ビーコンズフィールド卿がわが国に為した貢献の大きさをわかっていただくために、私は単純に、ビーコンズフィールド卿が帝国の運命を導くことをやめた時点での帝国の状態と現在の帝国の状態との対比について、考えていただくことをお願いします。彼が政権から追われた時、そしてそれからしばらくの間、わが国は静穏を享受し、国民の心には自信に充ちた感情がありました。今日の状況はどうでしょうか？ われらが帝国のあらゆる国境線で戦争が起こり、あるいは戦争が噂されています<sup>98)</sup>。



LORD BEACONSFIELD'S MEMORABLE INTERVIEW WITH HER  
MAJESTY THE QUEEN,

On July 30th, 1878, in the Palace, at Osborne, on his return from Berlin, bringing

“PEACE WITH HONOUR.”

Painted by T. BLAKE WIGMAN.

図版② Peace with Honour を達成したベルリン会議の成果について女王に報告するディズレイリ。 *Primrose League Gazette*, 6 Sept. 1890.

1908年のプリムローズ・デイに寄せられた文章が規定するディズレイリも、「首相として、その申し分ない機転と慎重な施策によってワールドワイドに広がるわれらが帝国を導き、帝国の各構成部分を結束させ、強化することに大変に貢献したブリテンの最も輝かしい政治家の1人」に他ならなかった<sup>99)</sup>。プリムローズ・リーグのグランド・マスターの地位にあったエドワード・カーソンが1924年のプリムローズ・デイに向けて発したメッセージにも、なによりも帝国との関連においてディズレイリを称揚する傾向がはっきりと示されている。「ビーコンズフィールド卿は、その長い政治的キャリアをわが国の帝国にかかわる利益の促進に捧げました。そして、ビーコンズフィールド卿の帝国政策が基礎としていた諸原則の生命力を保っていくことが、プリムローズ・リーグの目的なのです。」<sup>100)</sup> ここでは、ディズレイリの「長い政治的キャリア」は専ら帝国に結びつけられ（プリムローズ・リーグの目的も帝国護持に限定され）、他の領域における彼の政治的活動は想起されていない。

ディズレイリの果たした重大な役割としては、〈政治的民主化〉の時代に向けコンサヴァティズムを新たに方向づけたことがしばしば指摘される。画期を成した演説とされるのが1872年6月のクリスタル・パレスにおけるそれであり、この演説は、伝統的な国制の維持という保守党のかねてからの原則に加えて、帝国の擁護と民衆の生活状態の改善という2つの新

機軸を打ち出した。実際、帝国主義と並んで社会改革は世紀末から 20 世紀初頭にかけての保守党にとって中核的なテーマとなっていくのであり、上述したトーリ民主主義ということばも通常は社会改革の文脈で用いられた<sup>101)</sup>。しかし、ディズレイリのコメモレイションにあっては、帝国主義が圧倒的に言及され、無視まではされないにしても、社会改革は添え物的な扱いしか受けない。前者が党派や階級をこえて〈ナショナル〉な結束を強める効果をもちやすいトピックだったのに対し、後者は党派や階級の対立を先鋭にする可能性を常に孕んでおり、しかも、19 世紀末以降に展開された自由党のいわゆる〈ニュー・リベラリズム〉や、しばしば〈社会主義〉というレッテルを貼られたコレクティヴィズムとの決して容易ではないデリケートな差異化が求められたことが、ディズレイリに関する語りに見られる歪みのおそらく最大の理由であったと思われる。ボーア戦争から 2 回の世界大戦に至るコンテキストの中、〈ナショナル・ヒーロー〉としてディズレイリを構築していくにあたって、帝国主義は社会改革に比べてはるかに根拠づけに利用しやすい論点だった。〈ナショナル・ヒーロー〉が帝国主義に引きつけて語られる一方で、民衆の生活状態の問題をめぐるのは、〈トーリ民主主義を掲げてネーション全体に献身したディズレイリ〉といった程度の語り方で処理されたわけである。

さらに、ディズレイリの有するさまざまな顔のうちで〈ナショナル・ヒーロー〉に相応しくないと考えられたそれは、容赦なく忘却・隠蔽された。一例を指摘すれば、ユダヤ人としてのディズレイリである。自身はイングランド国教会で洗礼を受けていたとはいえ、ディズレイリがユダヤ人家系の出身であることは周知の事実であり、〈ユダヤ人の代表〉として彼に言及する論調はその死後の時期にもよく見られたし、また、ユダヤ人の人種の優秀性を論じることは彼の文学作品の重要なテーマでもあったが<sup>102)</sup>、コメモレイションの語りの中ではこの論点は周到に回避された。「偉大なイングリッシュ・イスラエライト」という表現が用いられるきわめて稀な事例の場合も、その直後には「彼はユダヤ人であるのに劣らずイングランド人であった」との補足が施され、〈イングリッシュな存在としてのディズレイリ〉を念押しすることが試みられる<sup>103)</sup>。ユダヤ人のイメージばかりが先行してしまえば、それは〈ナショナル・ヒーロー〉のイメージとは容易に結合されえなかったからであると思われる。

没後の時間が経過していくと、ディズレイリが〈過去の人〉ではないことが段々と強調されるようになる。1899 年のプリムローズ・デイに寄せた『タイムズ』論説はいう。「ビーコンズフィールド卿の死から 18 年を経た今、昨日のデモンストレーションが大変明確に示したように、この記念日はさして強くコメモレイションの儀式に熱心なわけでもない国民の思考の中に、揺るぎのない、はっきりとした位置を占めている。高尚な人は笑うかもしれない。そして、哲学的な人は、他の同じように傑出した人々の記憶が葬儀の後にはほとんど残らないというのに、どんな性質や業績によってビーコンズフィールド卿が人々のイマジネーションを捕らえているのかを説明しようとする課題を、失意のうちに放棄するかもしれない。」<sup>104)</sup> ディズレイリの強

靱な生命力を強調する際には、他の政治家との比較の議論が駆使された。「ピットもウェリントンも、パーマストンもピールも、その追憶のために壮麗なモニュメントが建設されているし、彼らの徳や叡知はたくさんの銅像に示されている … しかし、ヒュンデン・チャーチャードのどかな芝の下に眠っているビーコンズフィールド卿ほど、その記憶が生き生きと保たれている政治家はいない。」<sup>105)</sup> 1933年に出版された書物も、同様の指摘を行っている。「ほとんどの首相の影響は短命である。彼らが首相の座を去ると、その影響も感じられなくなる。しかしながら、ディズレイリの影響は持続しており、増大しつつある。毎年の「プリムローズ・デイ」（4月19日）を彩るセレブレーションと絶えることのない「プリムローズ・リーグ」の活動が、彼が死をも乗り越ええる力をもっていることの証左である。」<sup>106)</sup>

それでは、ディズレイリを「他の同じように傑出した人々」と差異化するものはなにか？ 多くの場合、それは先見性に裏打ちされた彼の政治的な信条や政策が後の時代においても充分な重要性を保持し、有益な示唆を含んでいる点に求められた。1903年5月の『プリムローズ・リーグ・ガゼット』は、1886年に始まる〈保守党支配の時代〉をもたらした人物としてディズレイリを特徴づけ、彼が依然として「生きつづけている」ことを力説する。

ビーコンズフィールド卿は恒久的復活〔1880年総選挙での敗北からの〕の種子を撒いた。そして、彼の同僚であった有能な政治家たちは彼の開始した作業を継続した。彼の敗北から5年以内、彼の死から4年以内に、保守党は再び政権を獲得し、その後の18年間のうち14年半にわたって政権を握っている … 保守党の継続的な勝利がユニオニスト〔リベラル・ユニオニスト〕との同盟に多くを負っていることは事実である。そして、それがビーコンズフィールド卿が祝福したであろう同盟であることもたしかである。それは、彼がかくも強く心に留めていた帝国統合の政策を支持する同盟である … 端的にこういうことができる。ビーコンズフィールド卿の理念は、その創始者が22年前にわれわれの許を去ったにもかかわらず、生きつづけている。… 保守党の政策は変わっていないのである<sup>107)</sup>。

あるいは、1904年12月21日の『タイムズ』論説は、ディズレイリは「19世紀の最も生き生きとし興味深いキャラクターの1人」という以上の存在であるとし、以下のようにつづける。「彼はイングランドの政治の舞台に登場した最も有力な個人の1人であった。… 実際、議会内の闘争によって終わってしまうことがなく、わが国の人々の心の中で発芽・成長し、自らが直接コントロールしているわけでもないナショナルな政策に影響を与え、自らの死後にも影響を与えつづけるような実り豊かな理念をかくも多く提示した者はほとんどいない。… 彼の理念はわれわれの間に生きつづけている。彼が初期に夢想したもののいくつかは、今日では現実に

なっている。』<sup>108)</sup> その理念が依然として政治的に有効であるという意味で、ディズレイリは〈過去の人〉ではなく、「依然として生きている力」であった。コメモレイションの場ではディズレイリの今日的有効性を語る言説が反復され、こうした言説の積み重ねを通じて、〈ナショナル・ヒーロー〉としてのディズレイリのイメージには、驚異的に強靱な政治的生命力という新たな性格が加えられていった。

そして、ディズレイリの生命力や今日的有効性を語る場合にも、焦点となるのはやはり彼の帝国主義であった。初期の例としては、「彼だったら現在のエジプトのごたごたからわれわれが脱却する道を見出すことだろうと考える者は少なくない」とする 1884 年 4 月 19 日の『タイムズ』論説を指摘できる。1906 年 5 月の『プリムローズ・リーグ・ガゼット』は、「あまりにも多くが忘却される時代」においてプリムローズ・デイが「ほとんどナショナルな行事」となり、「ディズレイリが他のあらゆる政治家以上に称賛されている」理由を、ディズレイリが「政治家であると同時に理想主義的で先見性のある、その夢が現実のものとなった予言者」である点に求め、中でも「帝国の意味を誰よりも早く理解した最初の、そして最も真正な帝国主義者」としてのディズレイリを強調している<sup>109)</sup>。1936 年のプリムローズ・デイに際してプリムローズ・リーグが発表した声明も、時の首相スタンリ・ボールドウィンに「ディズレイリアン」として描き出すとともに、ディズレイリの帝国への貢献を力説する。

歳月の経過によっても … ディズレイリの生涯と業績に対する関心は減じることがない。プリムローズ・リーグの今も継続する影響と活動は、わが国やその帝国にかかわる政治へのディズレイリの貢献が不滅のものであることの証である。保守党党首および首相としての彼の叡智と先見性は、ブリテン帝国の歴史に消えることのない足跡を残した。ディズレイリアンにしてプリムローズ・リーグのグランド・マスターでもあるスタンリ・ボールドウィン氏の指導の下、挙国一致政府はディズレイリのプロジェクトの多くを今日も遂行している。この事実が、彼の政策の正しさを証明している。そして、この政策を、50 年以上にわたってプリムローズ・リーグは成功裏に普及してきたのである。

こうした理由から、プリムローズ・リーグは、今年の彼の命日にあたり、挙国一致政府の支持者は彼の好きな花、プリムローズを着用することで、ディズレイリの記憶と帝国に対する彼の偉大な業績に称賛を捧げるべきであると確信する<sup>110)</sup>。

なによりも〈帝国にかかわる偉大な業績〉において記憶されるべきディズレイリの精神は、「ディズレイリアン」と規定されたボールドウィンという人物を通じて、依然として影響力を行使しているというわけである。ボールドウィンに「ディズレイリアン」と特徴づける議論は翌 1937 年にもプリムローズ・リーグのチャンセラー（グランド・カウンシルの長）だったエビ

シャム卿によって用いられ、ここでは、「わが国が他のいかなる国よりもうまくかつてなかった最大の商業・産業不況を乗り切った」ことも、ボールドウィン率いる挙国一致政府が「わが国とその帝国にかかわるディズレイリの政策を堅持した」ことによって説明されている<sup>111)</sup>。ディズレイリの先見性は大恐慌の克服にとってさえ有効だったというのである。

こういったコメモレイションの語りによって構築されたディズレイリのイメージを一口にまとめれば、次のようになるだろう。すなわち、〈なによりも帝国建設に貢献することでナショナルな幸福を増進し、その献身を女王から特別に高く評価され、私的にも愛された人物〉、〈党派や階級、地域をこえて尊敬と愛惜を集めるナショナル・ヒーロー〉であり、さらに、〈その精神が今日の状況においても有効性を発揮する稀有の先見性をもった政治家〉である。プリムローズという表象と結びついたディズレイリのコメモレイションは、たとえば、〈保守党の中興の祖〉といった党派的なスケールでは把握できないイメージをつくりあげたのである。いうまでもなく、こうしたディズレイリのイメージが〈ナショナル〉に受容されたなどと単純に想定することは馬鹿げている。それでも、間違いなく毎年やってくるプリムローズ・デイという記念日がディズレイリについての語りを反復する機会を提供したことの意味は小さくあるまい。年に一度プリムローズを着用したりディズレイリ像を訪れたりする者たちにはもちろんのこと、報道を通じて少しでもプリムローズ・デイに関心を寄せる者たちにも、語られたディズレイリのイメージは、かなりの程度の差を伴いつつ、着実に刷り込まれていったと考えられる。

## 7 プリムローズ・デイの継続と変容：1890年代以降

本稿の冒頭で述べたように、プリムローズ・デイの慣習は、おそらく細々とではあると思われるが、現在も生き残っているし（少なくとも、注3に掲げたマーガレット・ベイカーの著作が執筆された時点までは）、プリムローズ・リーグも、これまた昔日の勢力はないとはいえ、活動をつづけている。以下では、1880年代に定着を見たプリムローズ・デイが、その後も継続されていく中でいかなる変容を見せたかを簡単に確認しておこう。プリムローズ・リーグの歴史を扱うことは膨大な紙幅を必要とするので、第5節でも断った通り、この課題については改めて別の機会に譲りたい。

まず指摘できるのは、少なくとも第1次大戦以前の時期に関する限り、プリムローズ・デイのあり方に大きな変化は見られないことである。プリムローズという中核的な表象が厳然と存在したためあって、基本的には前例を踏襲するかたちで、つまり、プリムローズを着用し、プリムローズで銅像を飾りつけて、ディズレイリを偲ぶという基本線から逸脱することなく、プリムローズ・デイは継続され、「ポピュラーに認知された記念日の中で確固たる位置を」占めていった。この点は、ロンドンだけでなく、ヒュンデンをはじめとする地方についても同様



図版③ 1909年のプリムローズ・デイに際して飾りつけられるディズレイリ像。  
*Primrose League Gazette*, 1 May 1909.

であり、1895年5月1日の『プリムローズ・リーグ・ガゼット』が「総じて全国各地で祝われる記念日」と呼んでいるように、さまざまな地域で4月19日にちなむなんらかのイベントが開かれることが慣例化していた<sup>112)</sup>。ボア戦争の時期にも、戦争の影響がプリムローズ・デイに強く刻印されることはなかった<sup>113)</sup>。報道の文面でも「いつものように」「慣例的に」「通常のやり方で」「これまでの年と同じく」といった表現が目立つし、それどころか、『タイムズ』について見れば、プリムローズ・デイの様子を伝える文章そのものもいわば定型化の傾向を示している。次のような文章が、まったく同一ではないにしても、ほぼ同じかたちで毎年の紙面に登場するのである。「昨日のロンドンでは、プリムローズ・デイが恒例のやり方で祝われた。パーラメント・スクエアのビーコンズフィールド像は入念に飾りつけられ、プリムローズの着用は首都中で広く見られた。」<sup>114)</sup> (図版③)

それでも、もう少し仔細に検討してみると、プリムローズ・デイが変質していく兆候を見出

することができる。1893年11月の小さな訴訟が1つの手がかりになるだろう。この訴訟は、プリムローズ・リーグのレディズ・グランド・カウンシルからこの年のプリムローズ・デイのためにディズレイリ像に電飾を施すことを依頼された業者によるもので、ランプやバッテリーを準備して当日に臨みながら、警官に阻まれてディズレイリ像に近づけなかった業者が、契約不履行として支払いを拒まれていた実費分の負担をレディズ・グランド・カウンシルに求めたのである<sup>115)</sup>。入札の手順を踏んでディズレイリ像の飾りつけを専門業者に委託することは1890年代から通例となっていたが（業者が好き放題にデザインできたわけではなく、前日までに全国のプリムローズ・リーグ支部から送られてくる花輪その他の素材を利用することが基本だった）<sup>116)</sup>、ディズレイリ像の飾りつけに責任を負っていたプリムローズ・リーグの指導部は、この年、銅像に電飾を施すという新機軸を考慮するようになっていたわけである。電飾こそ実現されなかったものの、この年の飾りつけは「まったく新しい出発」を画するものとなり、「最もブリリアントなプリムローズ・デイの1つとして記録されるだろう」との評価を受けた。飾りつけの新機軸はその後積極的に導入され、たとえば1906年のプリムローズ・デイには「通常は触れられることのない銅像の頭の部分にプリムローズの王冠が載せられ」た<sup>117)</sup>。

こうした新機軸の導入は、おそらくはそれ以前から察知されていた事態、すなわち、プリムローズ・デイのディズレイリ像の飾りつけが〈見物人〉の興味を惹くようになっていたという事態に対応していると考えられる。たとえば、1901年のプリムローズ・デイの様子は次のように報道されている。「美しい春の日であったため、何千何万もの人々が、ビーコンズフィールド像の飾りつけを見るために、そして、銅像の立つ敷地内にプリムローズの花束を置いてこの政治家の記憶への敬意を示すために、パーラメント・スクエアに集まった。」<sup>118)</sup> この頃から、パーラメント・スクエアにやってくる者たちの行為はしばしば「眺める view」「検分する inspect」といった動詞で表現され、ディズレイリ像そのものよりもむしろその飾りつけがこの行為の目的語に置かれることが多くなる（In Parliament-square large crowds assembled throughout the day to view the decoration of the Beaconsfield's statue といった調子で）<sup>119)</sup>。今は亡きディズレイリを追慕するまなざしよりも、年中行事としての飾りつけを見物するまなざし前面に出てきていたと考えられる。

また、上記引用にある「美しい春の日であったため」という部分にも注目したい。天候をはじめとする外的条件がプリムローズ・デイの人出を左右する要因として指摘されているのは、この年ばかりではない。1896年の報道は、プリムローズ・デイの人出が空前の規模になったことを、前日のロンドンで開催されたフットボールの一番と「そうでなかったら家にいたであろう多くの者にパーラメント・スクエアを訪ねることを疑いもなく促した夏のような陽気」によって説明している。つまり、ディズレイリ像へと赴いた者の多くは、天候が悪ければわざわざ出向こうとは思わないような人々だということである。1905年の報道には、「雨模様の天気



のため、スクエアを訪ねた者は通常よりも少なかった」とある。この点は、1888年に関する、「午前中の激しい雨にもかかわらず、パーラメント・スクエアにはいつも通りの巡礼があった」し、「プリムローズがこれほど広く着用されたことはかつてなかったようだ」という報道と対照的である<sup>120)</sup>。第4節で指摘したプリムローズ・デイの〈大衆化〉が、いよいよ進行していたと判断してよいだろう。天気が悪ければあえてパーラメント・スクエアまで出かけていけない人々、ディズレイリ像の飾りつけが主たる関心の的である人々、定着したプリムローズ・デイを彩り、交通整理のための警官の増員を必要とするような状況をつくりだしていたのは<sup>121)</sup>、かなりの割合までこうした人々だったのであり、彼らはディズレイリの記憶と精神に傾倒する者たち（まず間違いなく少数派）とははっきりと一線を画する存在であった。パーラメント・スクエア周辺で「旺盛なビジネス」を展開していたとされる多くの花売りも、ディズレイリ信奉者よりも〈見物人〉たちを当て込んでいたと思われる<sup>122)</sup>。

多くの〈見物人〉を巻き込んだ賑やかな年中行事となっていたプリムローズ・デイは、第1次大戦の到来とともに一気に変容を遂げる。ブリテン史上初の〈総力戦〉の遂行に向け、プリムローズ・デイにも貢献が求められたのである。1915年のプリムローズ・デイの様子は、以下のように報道される。

… リーグは今年のプリムローズ・デイを新しいやり方で祝った。全国のブリテン赤十字のためにプリムローズの販売を行ったのであり、偶然であるが、これは新兵補充の目的にも役立った。この方法によって既に700ポンド以上が集められ、こうした活動には皇太子が心からの称賛を贈っている。ランカシアはミドルトンの女性労働者は地元支部のためにプリムローズを販売して20ポンド以上を稼ぎ、この金は兵士の慰安のための品を購入することに充てられる予定である<sup>123)</sup>。

ディズレイリの記憶のシンボルであったプリムローズが、大戦という状況の下、戦争目的にあわせて新たな役割を担っていることがわかる。大戦中のプリムローズ・デイは「われらが兵士を支援するための機会」となり、プリムローズ・リーグはこの日をプリムローズ販売による募金集めに費やすことを通例とした。また、大戦以前から実施されていたことではあるが、プリムローズ・デイに主としてロンドンの病院に配布されたプリムローズは、大戦中にはいわば〈癒しグッズ〉としての性格を強めたものと思われる。当然にも、「パーラメント・スクエアのビーコンズフィールド卿の銅像が大戦前のように念入りに飾りつけられることはな」く、プリムローズ・リーグが銅像の台座に花輪を捧げるのがせいぜいのところであった。飾りつけを楽しむにした〈見物人〉が、プリムローズ・デイに大挙繰り出すような事態は考えられなかった。大戦という特殊な状況が訪れるとともに、プリムローズ・デイは賑やかな年中行事であること

をやめたのであり、大戦後にディズレイリ像の飾りつけが再開されても、かつてのような人出はもはや見られなかったようである。1921年の報道を見ると、プリムローズ・デイにディズレイリ像に献花したのはプリムローズ・リーグのメンバーだけであり、一般の人々の献花・訪問は記されていない<sup>124)</sup>。

1921年、プリムローズ・リーグは新たなプリムローズ・デイの企画を打ち出す。ヒュンデンのディズレイリの墓と屋敷をプリムローズ・リーグの在ロンドン支部の代表たちが訪問する「巡礼 pilgrimage」である。「昨日、プリムローズ・デイを記念して、プリムローズ・リーグの重要メンバーたちがヒュンデン・チャーチャードへの巡礼を行った。ヒュンデン・チャーチャードで、彼らはホストであるカニングズビ・ディズレイリ少佐〔ディズレイリの財産の相続人となった甥、1892年から1906年まで庶民院議員を務めた〕と夫人に迎えられた。…その後、一行はマナ・ハウスを訪問し、ディズレイリ少佐夫妻によってビーコンズフィールド卿にまつわる多くの品を見せてもらった。」<sup>125)</sup> ディズレイリ像の飾りつけが〈見物人〉にさしてアピールしなくなった現状を受け、プリムローズ・リーグは、いわばよりシリアスにディズレイリをコメモレイトする企画として、「巡礼」を前面に打ち出したのであろう。1921年以降、プリムローズ・デイの恒例となった「巡礼」が着々と大規模化していくと、報道の関心は明らかにロンドンよりも〈聖地〉たるヒュンデンの方に傾くようになる<sup>126)</sup>。ロンドンからヒュンデンへの焦点の移行は、プリムローズ・デイの〈大衆化時代〉が完全に過ぎ去ったことを示す。わざわざヒュンデンまで「巡礼」しようとする者がディズレイリ信奉者に限定されることは明らかであり、「巡礼」に参加したのはプリムローズ・リーグのメンバーだけであった。ロンドンのディズレイリ像がかつて惹きつけたような多くの〈見物人〉は、「巡礼」とはかかわりようがなかった。

とはいえ、プリムローズ・リーグとしても、ロンドンにおけるプリムローズ・デイをまったく軽視してしまったわけではない。1924年には、「若者に愛国主義とよきシティズンシップの原則を植えつけ、ブリテン帝国の歴史と偉大さを説明するために」設置されていたプリムローズ・リーグのジュニア・ブランチ<sup>127)</sup>を動員して、プリムローズ・デイを祝う行進が企画された。「土曜日の朝、黄色いプリムローズの帯を身につけた子どもたちの行進がチェアリング・クロスから出発し、ビーコンズフィールド卿の銅像に、自分たちが着用していたプリムローズと、「ネーションの若者には後世が託されている」という彼自身のことばが組み込まれたプリムローズの小さな花輪を捧げた。」<sup>128)</sup> こうした行進は翌年以降も行われ、ロンドンのプリムローズ・デイの恒例イベントとなるとともに、ヒュンデンでも組織されていく。しかし、当初はそれなりに注目を集めはしたが、行進が〈見物人〉を多く集めた形跡はなく、行進そのもの、大人の参加をも得た1930年のそれで約900人といった程度の規模にすぎなかった<sup>129)</sup>。

1930年代に入る頃から、プリムローズ・デイはすっかり少数のディズレイリ信奉者のため

の日と化したようで、もはや『タイムズ』も稀にしか報道しなかった。そんな中、珍しく大きな扱いを受けた1939年のエピソードは、プリムローズ・デイが注目を集めた最後の場面といえるかもしれない。厳密にはプリムローズ・デイの前日である1939年4月18日、メアリ王妃がヒュンデンを訪問してディズレイリの残した財産やマニュスクリプトを視察し、当時議論されていたヒュンデン・トラストやディズレイリ協会の構想に対する関心を示したのである。これは、ヒュンデン・トラストと称する団体を設立し、トラストの管理の下、マナ・ハウスの一部をリサーチ・ルームとして公開しようとする構想で、翌日にヒュンデンを訪れた「巡礼」の代表が構想推進の意向を表明している<sup>130)</sup>。この構想がその後どれほど実現されたのかは判然としないが<sup>131)</sup>、プリムローズ・デイが忘却の危機にさらされる中、ディズレイリのための新しい〈記憶のかたち〉が考案されたものと見なしてよいだろう。まもなく始まる第2次大戦の時期には、「巡礼」を含め、プリムローズ・デイにちなんだあらゆる集团的セレモニーが自粛される<sup>132)</sup>。

#### むすびに代えて：〈伝説〉の破綻？

プリムローズ・デイの様子が報道されなくなって久しい1961年、『タイムズ』に掲載された小さな記事はもはや多くの人々の関心を惹くことはなかったかもしれない。しかし、ディズレイリとその伝統への思いをプリムローズに込める慣習を依然として守っていた者たちにとっては、この記事の内容は衝撃的であったに違いない。

ディズレイリ（その好きな花はプリムローズであると信じられていた）の「トリー民主主義の理想」を守るために設立されたプリムローズ・リーグは、プリムローズはこの偉大な政治家の好きな花ではないという判断に至った。

昨日リーグが開いた記者会見で述べられたのは、こういうことである。混乱は、「彼の好きな花」という献辞を添えてヴィクトリア女王からディズレイリの葬儀に贈られたプリムローズの花輪に起因すると考えられる。「彼の」という語は、今ではディズレイリではなくアルバート公を指していたとされている<sup>133)</sup>。

第4節で少し触れたように、プリムローズとディズレイリを結びつけることへの疑念は、実は以前からくすぶってはいた。1906年5月1日の『プリムローズ・リーグ・ガゼット』が認めている通り、「プリムローズがビーコンズフィールドの好きな花であったか否かは、長年にわたって論争的となってきた」のである<sup>134)</sup>。こうした論争を背景に、1900年代には、〈伝説〉を補強するような情報がしばしば提示された。ヒュンデン・エステイトの管理人が「卿のプリ

ムローズへの強い愛着については疑いありません」と証言したり、ディズレイリの伝記の著者、T. E. ケベルが太鼓判を捺したりすることもあったが<sup>135)</sup>、最も頻繁に持ち出されたサイド・ストーリーはブリッジズ・ウィリアムズ夫人をめぐるそれであった。「この政治家 [ディズレイリ] がトーキに赴き、友人であったブリッジズ・ウィリアムズ夫人を訪ねた時のことである。彼女は彼にプリムローズの花束を手渡しただけでなく、ディナー・テーブルを同じ花で飾りつけた。彼がプリムローズを称賛したことを受け、彼女はたくさんのプリムローズの苗をヒュンデンに送付するように手配した。ヒュンデンでは今日に至るまでそのプリムローズが咲き誇っている。」ユダヤ人家系の出身であったウィリアムズ夫人はディズレイリとの間に遠縁の関係があると信じ込んでおり、彼の隣に埋葬されることを条件に、3万ポンド以上に達する財産のすべてを彼に遺贈した人物であった<sup>136)</sup>。

プリムローズがどうしてビーコンズフィールド卿と関係づけられるようになったかに関し、若干の疑問が生じているようなので、次のことに触れておこう。ヴィクトリア・ストリートのプリムローズ・リーグのオフィスには、ブリッジズ・ウィリアムズ夫人からプリムローズの花束を贈られているビーコンズフィールド卿を写した写真がある。彼女は、その財産のすべてをビーコンズフィールド卿に遺贈した一風変わったレディである。写真の下に説明文によれば、この出来事ゆえ、ビーコンズフィールド卿はこのレディの追憶のために生涯を通じてプリムローズに心惹かれるようになったということである<sup>137)</sup>。

こうした補強の試みがどの程度の効果をもったかはわからないが、プリムローズ・デイの慣習を大切にしてきた人々の多くは、〈プリムローズを愛したディズレイリ、ディズレイリのためにプリムローズを贈ったヴィクトリア女王〉という〈伝説〉のフィクション性におそらく薄々は気づきつつも、あえて疑いを胸にしまい込んで、美しいストーリーを守ってきた。同じ〈伝説〉に由来する名称を冠するリーグによって〈伝説〉がついに公式に否定されるに至ったことが、こうした人々に衝撃を与えなかったはずはない。

1957年5月3日、グランド・マスターとしてプリムローズ・リーグの年次大会に出席したウィンストン・チャーチル（会員番号1番のメンバーシップ・カードをもつランドルフ・チャーチルの長男）のスーツのボタンホールには、たしかにまだプリムローズが着けられていた<sup>138)</sup>。ところが、1976年3月31日にマーガレット・サッチャーがプリムローズ・リーグの会合で演説した際の報道にも、1981年4月29日にハロルド・マクミランがディズレイリ没後100周年の演説をプリムローズ・リーグで行った際の報道にも、プリムローズへの言及は見られない<sup>139)</sup>。1961年の記者会見がターニング・ポイントとなって、今や根拠を失ったプリムローズのシンボリズムを活用することにプリムローズ・リーグが消極的になっていったと推測することは

外れではあるまい。

それでも、「はじめに」で述べたように、20世紀末に至るまで、プリムローズ・デイにはディズレイリ像がプリムローズで飾りつけられている。プリムローズ・デイの慣習は既に一人歩きを始めており、プリムローズとディズレイリをめぐる〈伝説〉は、その真実性がどんなかたちで否定されようとも、もはや覆しようがなくなっていたということかもしれない。あるいは、フィクション性が暴かれたところで、ディズレイリとプリムローズ・デイの慣習を愛する人々にとっては〈伝説〉の信憑性について神経質にならざるをえないプリムローズ・リーグ幹部のような人々を例外として、それはさして重要なことではなかったようにも思われる。C. B. トムソンを名乗る人物から『タイムズ』編集部に寄せられた次の手紙は、公式の否定の後になっても、〈伝説〉が生きつづけていたことを示唆している。

今朝[1970年6月25日]の『タイムズ』の記事の中で…ヘンリ・スタンホープはプリムローズをディズレイリの好きな花と書くという古典的誤りを犯しています。

ディズレイリが死んだ際、ヴィクトリア女王は「彼の好きな花」と書き込んだカードを添えてプリムローズの花束を贈りました。誰もが、プリムローズはディズレイリの好きな花だという意味と考えました。だからこそ、プリムローズ・リーグその他が生まれたのです。

プリムローズはアルバートの好きな花でした<sup>140)</sup>。

フィクションであろうがなかろうが、ディズレイリを追慕する人々には〈伝説〉を返上するつもりはなかったのだろう。トムソンのような人物がいかに〈正しい〉認識を求めてみても、1881年以来一貫してディズレイリのフローラル・エンブレムの役割を担わされてきたプリムローズは、真偽という次元をこえて、やはり〈ディズレイリの好きな花〉なのである<sup>141)</sup>。

19世紀以降の保守党を代表する政治家として、まず最初に指を屈すべき存在とされるのは、おそらく依然としてディズレイリである。たとえば、1994年に保守党議員を対象として行われた「最も影響を受けた著述家、書物」に関する調査では、ディズレイリの名を挙げる者が最多だった(第2位はエドモンド・パーク)<sup>142)</sup>。保守党近代化の礎石を築き、穀物法撤廃という歴史的決断をくだしたピール、1886年以降の〈保守党支配の時代〉を実現し、14年近くにわたって首相の座にあったソールズベリ、その他がいるにもかかわらず、彼らをさしおいて、多数派政権を率いた経験は一度しかなく(1874-80年)、失政も少なくなかったディズレイリがなぜこうした別格の地位を獲得することになったのだろうか? 少なからぬハンディキャップ(ユダヤ人家系という出自、十分な財産やオクスブリッジ教育の欠如、放蕩な生活が招いた膨大な借金、

等）を乗り越えて首相にまで上りつめた立身出世譚（プリムローズを思わせるような「慎ましい」出自から能力でのし上がった、といったイメージ）<sup>143)</sup>、小説家としてのキャリアが醸し出す余人にはない芸術的雰囲気、主として若い時期に示された強烈なエクセントリシティ、等々、そこには当然にも複数の理由があるはずだが、本稿で検討してきたように、ディズレイリがプリムローズという魅力的な表象に結びつけられ、毎年反復されるプリムローズ・デイのコメモレイションを通じてさまざまに語られ、〈ナショナル・ヒーロー〉に仕立て上げられていったことがもつ意味は小さくないだろう。プリムローズの〈伝説〉が女王とディズレイリの親密さを描き出したことも、ディズレイリを〈ナショナル〉な存在として印象づける力となったばかりでなく、ディズレイリという形象にロマンティックでドラマティックな雰囲気を付与する作用をおよぼした。さらに、コメモレイションが例外的に長期にわたって継続された結果、ディズレイリには並外れて強靱な生命力が担保された（ピールもウェリントンも、パーマストンもグラッドストンも凌駕してしまうような）。これに加えて、「ヴィクトリア時代で最大の政治組織」となったプリムローズ・リーグが折に触れてディズレイリを称揚し、その活動を通じてディズレイリの存在を肥大化させていったことも見逃せない。プリムローズの表象するディズレイリの記憶はさまざまな歪曲を孕みつつ旺盛に〈横領〉され、他の政治家（彼らとて各々にコメモレイトはされたであろうが、プリムローズほど強力な表象を与えられることはなかった）をしのぐインスピレーションの源泉へとディズレイリを成型していったのである<sup>144)</sup>。

## 注

- 1) 加藤憲市『英米文学植物民俗誌』富山房、1976年、p. 512. ただし訳語は改変してある。
- 2) 「命日」に固有の英語は使用されず、anniversary of the death of ... と表記されるのが通例である。また、命日を目的語として celebrate という動詞が用いられることは珍しくない。
- 3) Margaret Baker, *London Statues and Monuments*, Princes Risborough, 1995, p. 23; cf., Edward Gleichen, *London's Open-Air Statuary*, London, 1928, p. 38.
- 4) *Times*, 19 April 1911.
- 5) 〈記憶のかたち〉というコメモレイションの理解については、阿部安成・小関隆ほか（編）『記憶のかたち：コメモレイションの文化史』柏書房、1999年、参照。
- 6) Primrose League, *The Primrose League: Its Rise, Progress, and Constitution*, London, 1887, p. 3.
- 7) *Manchester Guardian*, 20, 21, 22 April 1881; *Times*, 26 April 1881; John Wolffe, *Great Deaths: Grieving, Religion, and Nationhood in Victorian and Edwardian Britain*, Oxford, 2000, pp. 159–61; Roland Quinault, “Disraeli and Buckinghamshire”, Helen Langley (ed.), *Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield: Scenes from an Extraordinary Life*, Oxford, 2003, p. 41; Robert Blake, *Disraeli*, 1966, paperback edn. 1969 (谷福丸 訳『ディズレイリ』大蔵省印刷局、1993年), pp. 871–2. この文献の注記は邦訳による。

- 8) *Times*, 27 April 1881.『マンチェスター・ガーディアン』の報道によれば、花輪に添えられたことばは「真実の愛情、友情、尊敬の印に」であった。また、『マンチェスター・ガーディアン』の場合、プリムローズに言及はしているものの、特にコメントは加えておらず、『タイムズ』の報道ぶりとはっきりとコントラストを成している。*Manchester Guardian*, 27 April 1881.
- 9) *Times*, 27 April 1881; Wolffe, *op. cit.*, p. 166.
- 10) *Times*, 11, 27 May 1881; Blake, *op. cit.*, p. 873; Wolffe, *op. cit.*, pp. 164–5.
- 11) *Primrose League Gazette*, 1 May 1906, 1 April 1907, 1 April 1909.
- 12) *Times*, 20 April 1882, 4 April 1883; Wolffe, *op. cit.*, p. 168.
- 13) *Times*, 4 April 1883.
- 14) *Times*, 29 March 1883; *Primrose League Gazette*, 1 April 1907.
- 15) *Times*, 4 April 1883.
- 16) *Times*, 23 April 1883.
- 17) 1772年に創刊、1937年に『デイリ・テレグラフ』に吸収される。アルジャーノン・ボースウィック（注44を参照）が編集長を務めた時代には、『タイムズ』に次ぐ権威ある地位を獲得した。もともとはパーマストン支持の政治的姿勢を見せていたが、ディズレーリ時代にはとりわけ彼の帝国主義政策に熱烈な支持を寄せた。また、アイルランド・ナショナリズムへの断固とした敵対姿勢でも有名であった。Wilfred Hindle, *The Morning Post, 1772–1937: Portrait of a Newspaper*, London, 1937, pp. 2–4, pp. 204–7, pp. 218–24, pp. 232–4; G. A. Cranfield, *The Press and Society: From Caxton to Northcliffe*, London, 1978, pp. 209–10.
- 18) *Morning Post*, 19 April 1883.
- 19) *Ibid.*
- 20) *Morning Post*, 20 April 1883; *Manchester Guardian*, 19 April 1883.
- 21) *Primrose League Gazette*, 5 May 1892.
- 22) Paul Smith, *Disraeli: A Brief Life*, Cambridge, 1996, paperback edn., 1999, pp. 213–4. なお、プリムローズを用いたディズレーリ追悼を「非イングランド的」として嫌忌する態度は、第1節で見たセント・ステューヴンズ・クラブも示したものであるが、いずれの場合も、含意されているのは物神崇拝的な姿勢への拒否反応であると思われる。
- 23) *Primrose League Gazette*, 5 May 1892.
- 24) *Morning Post*, 20 April 1883.
- 25) *Ibid.*
- 26) *Times*, 20 April 1883.
- 27) 光永雅明「銅像の貧困：19–20世紀転換期ロンドンにおける偉人銅像の設立と受容」阿部・小関ほか（編）『記憶のかたち』p. 97; Wolffe, *op. cit.*, p. 163, p. 280.
- 28) *Manchester Guardian*, 20 April 1883; *Morning Post*, 20 April 1883; Wolffe, *op. cit.*, p. 165.
- 29) *Times*, 20 April 1883.
- 30) *Morning Post*, 20 April 1883.
- 31) *Manchester Guardian*, 20 April 1881, 20 April 1883.
- 32) *Manchester Guardian*, 21 April 1881.
- 33) 二大政党とアイルランド・ナショナリスト党につづく4番目の党を意味するが、実際には保守党内の小グループであるにすぎない。チャーチル以外のメンバーはジョン・ゴースト、ヘンリ・ドラモンド・ウォルフ、アーサー・ジェイムズ・バルフォアであり、バルフォアはまもなく「第

- 四党」とは一線を画すようになる。第3次選挙法改正をめぐって内部対立が激化し、チャーチルが第1次ソールズベリ政権の閣僚となることで、自立的な政治グループとしての「第四党」は事実上解体する。Winston Spencer Churchill, *Lord Randolph Churchill*, London, 1907, pp. 273-4 ; W.J. Wilkinson, *Tory Democracy*, New York, 1925, p. 103.
- 34) Paul Adelman, *Gladstone, Disraeli & Later Victorian Politics*, 3<sup>rd</sup> edn., Harlow, 1997, pp. 36-7 ; N.J. Crowson, *The Longman Companion to the Conservative Party since 1830*, Harlow, 2001, p. 232 ; G.E. Maguire, *Conservative Women: A History of Women and the Conservative Party, 1874-1997*, Basingstoke, 1998, pp. 27-8 ; Martin Pugh, *The Tories and the People, 1880-1935*, Oxford, 1985, p. 11 ; Janet Henderson Robb, *The Primrose League, 1883-1906*, New York, 1942, pp. 31-2 ; Duncan Watts, *Tories, Conservatives and Unionists, 1815-1914*, London, 1994, pp. 118-9.
- 35) F.J.C. Hearnshaw, *Conservatism in England: An Analytical, Historical, and Political Survey*, London, 1933, p. 227 ; Blake, *op. cit.*, p. 846 ; Smith, *op. cit.*, p. 208 ; Wilkinson, *op. cit.*, p. 79, p. 90.
- 36) 第2節で引用したソールズベリの演説は、この役割の範囲内で行われたものである。
- 37) Churchill, *op. cit.*, pp. 191-2.
- 38) *Times*, 29 March 1883.
- 39) *Times*, 2 April 1883 ; *Manchester Guardian*, 20 April 1883 ; Churchill, *op. cit.*, pp. 196-7 ; Robb, *op. cit.*, p. 32 ; Wilkinson, *op. cit.*, pp. 91-2.
- 40) *Morning Post*, 30 April 1883 ; R.F. Foster, *Lord Randolph Churchill: A Political Life*, Oxford, 1981, pp. 115-6.
- 41) *Morning Post*, 30 April 1883 ; Churchill, *op. cit.*, p. 202 ; Wilkinson, *op. cit.*, pp. 65-6.
- 42) Malcolm Pearce & Geoffrey Stewart, *British Political History, 1867-2001: Democracy and Decline*, 3<sup>rd</sup> edn., London, 2002, p. 87 ; R.E. Quinault, "Lord Randolph Churchill and Tory Democracy, 1880-1885", *Historical Journal*, vol. 22, no. 1, 1979, pp. 163-5 ; Hearnshaw, *op. cit.*, p. 225 ; Wilkinson, *op. cit.*, p. 66.
- 43) Churchill, *op. cit.*, p. 207.
- 44) 1852-76年に『モーニング・ポスト』編集長、1886年にはサウス・ケンジントンから庶民院議員に当選し、1895年、グレネスク卿に叙される。Hindle, *op. cit.*, pp. 203-5.
- 45) Primrose League, *The Primrose League Handbook*, London, n.d. [1943?], p. 2 ; Algernon Borthwick, "The Primrose League", *Nineteenth Century*, vol. XX, July-December 1886, p. 33 ; Bruce Coleman, *Conservatism and the Conservative Party in Nineteenth-Century Britain*, London, 1988, p. 197 ; David Paterson, *Liberalism and Conservatism, 1846-1905*, Oxford, 2001, p. 131 ; Richard Shannon, *The Age of Salisbury, 1881-1902: Unionism and Empire*, London, 1996, pp. 114-5 ; Reginald Lucas, *Lord Glenesk and the Morning Post*, London, 1910, p. 294 ; Hindle, *op. cit.*, p. 233 ; Maguire, *op. cit.*, pp. 28-9 ; Pugh, *op. cit.*, pp. 12-3 ; Robb, *op. cit.*, pp. 36-8 ; Watts, *op. cit.*, pp. 108-9 ; Wolffe, *op. cit.*, pp. 165-6. とはいえ、プリムローズ・リーグ設立にあたって財政的負担を主として背負ったのはチャーチルであった。
- Primrose League Gazette*, 1 Feb. 1895.
- 46) *Primrose League Gazette*, 8 Oct. 1887, 16 June 1888.
- 47) *Primrose League Gazette*, 24 Dec. 1887 ; Churchill, *op. cit.*, pp. 208-9.



- 48) Lucas, *op. cit.*, p. 298. 1879 年 11 月 10 日, マンション・ハウスにおいてディズレイリは次のように演説した。「貴方の政治とはなにかと問われて, 最も偉大なローマ人の 1 人はこう答えた。Imperium et Libertas と。ブリテンの政府にとっても, これは悪くない綱領でしょう。」Andrew Gamble, *Between Europe and America: The Future of British Politics*, Basingstoke, 2003, p. 161.
- 49) Primrose League, *The Primrose League Election Guide*, London, 1914, pp. 14-6; Pugh, *op. cit.*, pp. 13-5.
- 50) Primrose League, *Election Guide*, pp. 14-6; Hugh Cunningham, *The Challenge of Democracy: Britain, 1832-1918*, Harlow, 2001, p. 136; Maguire, *op. cit.*, p. 29; Pugh, *op. cit.*, pp. 13-5; Robb, *op. cit.*, p. 38; Shannon, *op. cit.*, pp. 114-5.
- 51) Ruling Council Minute Book, 15 Dec. 1883, Primrose League Papers, vol. 1, Bodleian Library, Oxford; *Morning Post*, 17 Dec. 1883; Churchill, *op. cit.*, p. 209.
- 52) *Morning Post*, 17 Dec. 1883.
- 53) *Times*, 17 Dec. 1883.
- 54) *Primrose League Gazette*, 8 Oct. 1887; *Morning Post*, 17 Dec. 1883.
- 55) Ruling Council Minute Book, 15 March 1884, 11 March 1885, Primrose League Papers, vol. 1; *Morning Post*, 20 March 1884; *Times*, 20 April 1886, 20 April 1888.
- 56) *Primrose League Gazette*, 13 April 1889.
- 57) *Times*, 20 April 1886, 20 April 1888.
- 58) *Times*, 20 April 1887, 19 April 1889; *Primrose League Gazette*, 21 April 1888, 20 April 1889.
- 59) ナイトだけで構成されるグランド・カウンシルに対し, 1885 年 3 月にデイムの指導機関として設置された。ただし, いずれのカウンシルからもアソシエイトは締め出されている。ナイト, デイム, アソシエイト, 等, プリムローズ・リーグのメンバーのカテゴリーについては, 第 5 節参照。
- 60) *Times*, 21 April 1884, 20 April 1887, 20 April 1889.
- 61) *Times*, 21 April 1884.
- 62) *Times*, 20 April 1887.
- 63) *Times*, 20 April 1888.
- 64) *Primrose League Gazette*, 19 May 1888.
- 65) *Times*, 20 April 1888.
- 66) *Morning Post*, 24 Jan. 1884.
- 67) *Times*, 20 April 1888.
- 68) *Times*, 20 April 1886. 1905 年のプリムローズ・デイの際には, ディズレイリ像を飾るプリムローズ等でつくられた標語の中に, 「保護主義は単なる死ではない, それは呪われた死である」というそれが含まれていた。ちょうど関税改革をめぐる論争が高揚していた時期であり, ディズレイリのことを反関税改革派が利用したものと思われる。プリムローズ・デイに, しかもディズレイリ像そのものに, これだけはっきりと時事的な政治問題が持ち込まれるのは稀であって, 『プリムローズ・リーグ・ガゼット』は, 「ある嘆かわしい行為がよきテイストを破り, プリムローズ・デイのセレブレーションを傷つけた」と批判的に報じている。関税改革問題については中立を保ちたいというプリムローズ・リーグの方針に反するものだったからでもある。*Times*, 20 April 1905; *Primrose League Gazette*, 1 May 1905; Pugh *op. cit.*, pp. 168-9; Robb,

- op. cit.*, pp. 83 – 4.
- 69) *Times*, 20 April 1888.
- 70) *Times*, 19 April 1884, 20 April 1885.
- 71) *Times*, 20 April 1885; *Primrose League Gazette*, 18 April 1891; Primrose League, *Election Guide*, p. 13, p. 171; Primrose League, *Handbook*, p. 1; T. A. Jenkins, *Disraeli and Victorian Conservatism*, Basingstoke, 1996, pp. 138 – 9, p. 142; Borthwick, *op. cit.*, p. 34; Hearnshaw, *op. cit.*, p. 229; Pugh, *op. cit.*, p. 20; Shannon, *op. cit.*, p. 115; Smith, *op. cit.*, p. 214; Watts, *op. cit.*, p. 109.
- 72) *Times*, 18 April 1884; Robb, *op. cit.*, pp. 221 – 3.
- 73) *Primrose League Gazette*, 16 April, 15, 22 Oct. 1892; Primrose League, *Its Rise, Progress, and Constitution*, p. 24; Robb, *op. cit.*, p. 104.
- 74) *Primrose League Gazette*, 2 June, 21 July 1888.
- 75) Primrose League, *Election Guide*, p. 28.
- 76) George Cornwallis-West, *The Reminiscences of Lady Randolph Churchill*, London, 1908, p. 99.
- 77) Ruling Council Minute Book, 23 April 1884, Primrose League Papers, vol. 1; John Belchem, *Class, Party and the Political System in Britain, 1867–1914*, Oxford, 1990, p. 27; Pugh, *op. cit.*, p. 25; Shannon, *op. cit.*, pp. 30 – 1.
- 78) Ruling Council Minute Book, 22 Dec. 1883, Primrose League Papers, vol. 1; Primrose League, *Its Rise, Progress, and Constitution*, p. 5.
- 79) Ladies' Executive Committee Minute Book, 17 July 1885, 20 Feb. 1886, Primrose League Papers, vol. 10; *Times*, 23 Jan. 1886; *Morning Post*, 14 Feb., 6 March 1884; Jon Lawrence, "Class and Gender in the Making of Urban Toryism, 1880 – 1914", *English Historical Review*, vol. 108, 1993, pp. 645 – 6; Martin Pugh, "Popular Conservatism in Britain: Continuity and Change, 1880 – 1987", *Journal of British Studies*, vol. 27, no. 3, July 1988, pp. 260 – 1, p. 266; Martin Pugh, *The Making of Modern British Politics, 1867–1939*, 2<sup>nd</sup> edn., Oxford, 1993, pp. 56 – 7; Martin Pugh, *The March of the Women: A Revisionist Analysis of the Campaign for Women's Suffrage, 1866–1914*, Oxford, 2000, pp. 110 – 1; Linda Walker, "Party Political Women: A Comparative Study of Liberal Women and the Primrose League, 1890 – 1914", Jane Rendall (ed.), *Equal or Different: Women's Politics, 1800–1914*, Oxford, 1987, p. 166; Coleman, *op. cit.*, pp. 197 – 8; Maguire, *op. cit.*, pp. 30 – 4; Pugh, *The Tories and the People*, p. 15, p. 25, p. 39, p. 48; Robb, *op. cit.*, p. 109.
- 80) Ruling Council Minute Book, 22 March 1884, 18, 30 March 1885, Primrose League Papers, vol. 1; *Primrose League Gazette*, 24 Dec. 1887; *Morning Post*, 17 Dec. 1883; Borthwick, *op. cit.*, p. 38; Cunningham, *op. cit.*, pp. 136 – 7; Pugh, *The Tories and the People*, p. 24, pp. 29 – 30; Pugh, *The Making of Modern British Politics*, pp. 54 – 5; Walker, *op. cit.*, p. 170.
- 81) 1913年まで、プリムローズ・リーグは自らを形式的には保守党に対して自立的な存在と規定していた。スタンスの原則は以下の通り。「プリムローズ・リーグは保守党を支援するために設立されたのではない。保守党がプリムローズ・リーグの原則に忠実である限りは支援するが、それ以上のことはない。」*Primrose League Gazette*, 30 June 1888.

- 82) R. L. Greenall, "Popular Conservatism in Salford, 1868–1886", *Northern History: A Review of the History of the North of England*, vol. IX, 1974, pp. 132–5 ; Neville Kirk, *The Growth of Working Class Reformism in Mid-Victorian England*, Beckenham, 1985, pp. 337–40 ; Pugh, *The Tories and the People*, pp. 16–7, pp. 83–5 ; Robb, *op. cit.*, p. 50.
- 83) Grand Council Minute Book, 20 Jan. 1886, Primrose League Papers, vol. 1 ; *Times*, 3 March 1884 ; Adelman, *op. cit.*, pp. 43–4 ; Belchem, *op. cit.*, p. 27 ; Coleman, *op. cit.*, pp. 197–8 ; Foster, *op. cit.*, pp. 132–4 ; Pugh, *The Tories and the People*, p. 15, pp. 25–6 ; Pugh, *The March of the Women*, pp. 110–1 ; Robb, *op. cit.*, p. 33, pp. 39–41.
- 84) Robert McKenzie & Allan Silver, *Angels in Marble: Working Class Conservatism in Urban England*, Chicago, 1968 (早川崇 訳『大理石のなかの天使：英国労働者階級の保守主義者』労働法令協会, 1973年), p. v (この文献の注記は原文による) ; Adelman, *op. cit.*, p. 44 ; Pugh, *The Tories and the People*, p. 27, p. 168 ; Robb, *op. cit.*, p. 228.
- 85) Pugh, *The Tories and the People*, chap. 5.
- 86) *Primrose League Gazette*, 16 June 1888.
- 87) *Times*, 19 April 1884, 21 April 1891.
- 88) *Primrose League Gazette*, 21 April 1888.
- 89) *Primrose League Gazette*, 6 May 1893.
- 90) *Primrose League Gazette*, 21 April 1888.
- 91) Stuart Ball, *The Conservative Party and British Politics, 1902–1951*, Harlow, 1995, pp. 7–8 ; Antoinette Burton (ed.), *Politics and Empire in Victorian Britain: A Reader*, New York, 2001, p. 131 ; Watts, *op. cit.*, pp. 116–7.
- 92) *Manchester Guardian*, 20 April 1881 ; Blake, *op. cit.*, p. 870.
- 93) *Times*, 20 April 1881 ; *Primrose League Gazette*, 18 April 1891, 1 Jan. 1895.
- 94) *Primrose League Gazette*, 1 April 1901 ; Jane Ridley, "Disraeli and Women", Langley, *op. cit.*, p. 49.
- 95) *Times*, 20 April 1889.
- 96) *Times*, 20 April 1900 ; Wolffe, *op. cit.*, pp. 181–2, p. 186.
- 97) *Times*, 20 April 1905, 20 April 1908 ; *Primrose League Gazette*, 23 April 1892, 22 April 1893, 1 May 1909.
- 98) *Times*, 15 May 1885.
- 99) *Primrose League Gazette*, 1 April 1908.
- 100) *Times*, 19 April 1924.
- 101) Adelman, *op. cit.*, pp. 21–2, p. 26 ; Burton, *op. cit.*, p. 131 ; Gamble, *op. cit.*, p. 165 ; Watts, *op. cit.*, p. 80, p. 93 ; 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房, 1980年, pp. 90–1.
- 102) *Manchester Guardian*, 20 April 1881 ; Todd M. Endelman & Tony Kushner, "Introduction", do (eds.), *Disraeli's Jewishness*, London, 2002, pp. 1–2, p. 7 ; L. P. Curtis, Jr., *Anglo-Saxons and Celts: A Study of Anti-Irish Prejudice in Victorian England*, Bridgeport, 1968, p. 30 ; Reginald Horsman, "Origins of Racial Anglo-Saxonism in Great Britain before 1850", *Journal of the History of Ideas*, vol. XXXVII, no. 3, July–Sept. 1976, pp. 403–4 ; Blake, *op. cit.*, pp. 236–8 ; Smith, *op. cit.*, pp. 215–6.

- 103) *Primrose League Gazette*, 1 May 1906.
- 104) *Times*, 20 April 1899.
- 105) *Primrose League Gazette*, 18 April 1891.
- 106) Hearnshaw, *op. cit.*, p. 224.
- 107) *Primrose League Gazette*, 1 May 1903.
- 108) *Times*, 21 Dec. 1904.
- 109) *Times*, 19 April 1884; *Primrose League Gazette*, 1 May 1906.
- 110) *Times*, 16 April 1936.
- 111) *Times*, 20 April 1937.
- 112) *Times*, 20 April 1899; *Primrose League Gazette*, 25 April 1891, 22 April 1893.
- 113) *Times*, 20 April 1900, 20 April 1901.
- 114) *Times*, 20 April 1891, 20 April 1892, 20 April 1897, 20 April 1898, 20 April 1900, 20 April 1903, 20 April 1904.
- 115) *Times*, 8 Nov. 1893.
- 116) Grand Council Minute Book, 21 March 1901, Primrose League Papers, vol. 3; *Times*, 20 April 1908, 20 April 1909, 20 April 1911, 20 April 1912; *Primrose League Gazette*, 23 April 1892, 22 April 1893, 1 April 1898, 1 April 1899, 1 April 1900, 1 April 1901, 1 April 1902, 1 April 1903, 1 April 1904, 1 April 1905, 1 April 1906, 1 April 1908, 1 April 1909.
- 117) *Times*, 20 April 1906; *Primrose League Gazette*, 6 May 1893.
- 118) *Times*, 20 April 1901.
- 119) *Times*, 20 April 1900, 20 April 1901, 20 April 1903, 20 April 1906; *Primrose League Gazette*, 1 May 1903.
- 120) *Times*, 20 April 1896, 20 April 1905; *Primrose League Gazette*, 21 April 1888.
- 121) *Primrose League Gazette*, 22 April 1893.
- 122) *Times*, 20 April 1906; *Primrose League Gazette*, 23 April 1892.
- 123) *Times*, 20 April 1915.
- 124) *Times*, 19 April 1918, 21 April 1919, 20 April 1921; *Primrose League Gazette*, 1 May 1903; Tony Kushner, "One of us? Contesting Disraeli's Jewishness and Englishness in the Twentieth Century", Endelman & Kushner, *op. cit.*, p. 211. 第1次大戦後のブリテンでパブリックな意味を帯びた表象となった花には赤いポピーと白いポピーがあるが、プリムローズとの継承関係は確認できない。佐々木雄太「イギリスの戦争と帝国意識」木畑洋一（編）『大英帝国と帝国意識：支配の深層を探る』ミネルヴァ書房，1998年，p. 245.
- 125) *Times*, 20 April 1921; Quinault, "Disraeli and Buckinghamshire", p. 41.
- 126) *Times*, 20 April 1922, 20 April 1923.
- 127) 淵源は1892年10月に設立されたプリムローズ・パッドにあり，1911年からプリムローズ・リーグの若年者部門としてジュニア・ブランチがフォーマルな組織に組み込まれた。対象年齢は7歳から16歳までである。Primrose League, *Election Guide*, p. 11, p. 29, pp. 35-7; Pugh, *The Tories and the People*, pp. 40-1; Pugh, "Popular Conservatism in Britain", p. 263.
- 128) *Times*, 21 April 1924.
- 129) *Times*, 19 April 1924, 8, 20 April 1925, 21 April 1930, 16 April 1938.
- 130) *Times*, 19, 20 April 1939.

- 131) ヒュンデンの旧ディズレイリ邸は、1949年以来、ナショナル・トラストの所有となっている。  
Blake, *op. cit.*, p. 876.
- 132) *Times*, 20 April 1940, 17 April 1942.
- 133) *Times*, 25 April 1961.
- 134) *Primrose League Gazette*, 1 May 1906.
- 135) *Primrose League Gazette*, 1 Feb. 1901, 1 April 1904.
- 136) *Manchester Guardian*, 26 April 1881; *Primrose League Gazette*, 1 May 1906; Blake, *op. cit.*, p. 872, p. 875; Ridley, *op. cit.*, pp. 48-9.
- 137) *Times*, 20 April 1910.
- 138) *Times*, 14 April 1956, 4 May 1957.
- 139) *Times*, 1 April 1976, 30 April 1981.
- 140) *Times*, 27 June 1970.
- 141) たとえば、現在でも決定版としての地位を失っていない1966年初版のロバート・ブレイクのディズレイリ伝は、「彼の好きな花」と書いた女王が想定していたのはディズレイリ以外にありえない、という見解を採っている。Blake, *op. cit.*, p. 867, p. 873.
- 142) サッチャー時代において、ディズレイリの政策やスタンス（とりわけOne Nationというスローガン）は〈ニュー・ライト〉に対抗する保守党内のいわゆる〈ウェット〉によって好意的に言及されることが多かったが、他ならぬサッチャー自身もディズレイリを「近代トーリズムの始祖」と称揚していた。意外な事例としては、自らの政策を「ディズレイリ派コンサヴァティヴ」と性格づけた第37代アメリカ大統領リチャード・ニクソンがいる。泥沼化したヴェトナム戦争の收拾をニクソンが図った際のキーワードとされたのが他ならぬPeace with Honour（アメリカ式に綴ればHonor）であった。John K. Walton, *Disraeli*, London, p. 1, pp. 5-6, pp. 66-7; Smith, *op. cit.*, p. 211, p. 214.
- 143) *Primrose League Gazette*, 1 April 1901.
- 144) Jenkins, *op. cit.*, pp. 141-2; Watts, *op. cit.*, pp. 108-9, pp. 157-8.